第５章　近世陶磁器からみる西日本の受容

前章で述べたように、陶磁器の流通は広域・中域・小域に流通し、その内容も時代の経過において地域差、経済格差などの影響を受け変化していた。ここでは流通された陶磁器がどのように受容されたかを考えてみる。

第１節　近畿の都市民の土器・陶磁器の様相差

近年、各地で近世都市遺跡の発掘調査も進展をみせているが、多くの遺跡において、城郭の場合は本丸や武家屋敷に位置する二の丸調査が大半であり、町屋地域を含んだとしても中心部と考えられる地域に限られ、都市及びその周辺部に至るまで調査の手が及んだ例はごく僅かである。そのため多くの近世遺跡では限られた範囲の調査結果によって、これが各遺跡の土器・陶磁器様相であると示される例が多い。

しかし、遺跡全体を対象としなければその遺跡の土器・陶磁器の真の様相とは言えず、また都市や集落には身分・経済力・生活習慣による差異があるはずであり、それが遺跡の特徴を示す場合もあると考えられる。今回、兵庫津遺跡においてその試みを行うことができた。成果は以下の通りである。

１　兵庫津遺跡について

兵庫津遺跡は、兵庫県神戸市兵庫区中の島を中心とした古代から近代にかけての複合遺跡である。古代には大輪田泊とよばれ、中世は日宋貿易の一中心港、近世以降は瀬戸内航路の重要な中継基地として現代神戸港の基礎を築いた、古代から近代を通して栄えた港湾都市であった。これまでに発掘調査は 40 数次行われる（第 211 図）。調査範囲も西国街道沿いの七宮町（第 14[1]・20 次[2]）・西仲町（第４次[3]）などの中心部をはじめ、近世の惣門の外側に位置する東出町（第 13 次[4]）、西出町（第 12 次[5]）と相当の範囲に及ぶ。また、兵庫津遺跡の南辺部にあたる御崎本町の第２次地点[6]は、江戸時代は兵庫津の中心部より離れており、この時代の兵庫津遺跡周辺の状況を知ることができる。

---

[1]神戸市教育委員会『平成 10 年度神戸市埋蔵文化財年報』2001 年
[2]神戸市教育委員会『平成 11 年度神戸市埋蔵文化財年報』2002 年
[3]神戸市教育委員会『平成２年度神戸市埋蔵文化財年報』
[4]岡田章一・長谷川真他『兵庫津遺跡Ⅱ（浜崎・七宮地区の調査）一般国道２号共同溝整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』兵庫県教育委員会 2004 年
[5]兵庫県教育委員会『兵庫津遺跡Ⅱ（西出地区の調査）』2002 年
[6]藤本史子・赤松和佳他『兵庫津―御崎本町地点発掘調査報告書―』大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター2006 年

今回は、第２次地点を中心とし、兵庫津の中心部に位置した七宮町の第 14 次地点、第36[7]・38[8]次地点の土器・陶磁器を比較検討し、兵庫津における中心部の町屋部と周辺部との組成の相違点や相似点を述べる。

２　分析方法

分析方法は、第１章に基づいておこなった。数量の算出方法については、網羅的に算出できる破片計測方法を採用した。なお、今回、比較対照した資料は、各地点で遺物が一定量認められる 16 世紀末以降の資料に限定した。また、灯火具、神仏具、化粧具、文具に属するものの数値が１％未満であるため、個別の説明が必要な場合以外は、灯火具、化粧具としてまとめて表示する。

３　各地点の土器・陶磁器の様相

①　第２次地点の土器・陶磁器の様相

第２次地点は、兵庫津遺跡南側の御崎本町に位置する（第 211 図－１）。江戸時代は絵図・文献資料などから兵庫津の中心部より離れたところにあたる。遺構面は４面あり、９世紀～20 世紀代の遺物が出土する。建物は 15 世紀～16 世紀前期、16 世紀後期～17 世紀前期の掘立柱建物跡を検出するが、調査区に屋敷境が設けられ町屋を検出するのは 18 世紀後期以降であり、この頃に本格的に町屋が形成されたと考えられている。

各遺構面の年代は、第４遺構面は 15 世紀後期以前～16 世紀前期、第 3 遺構面は 16 世紀末～17 世紀中期、第 2 遺構面は 18 世紀後期～19 世紀前期、第 1 遺構面は 19 世紀中期以降である。遺構面ごとの状況は以下の通りである。

第３遺構面（16 世紀末～17 世紀中期）

第３遺構面の産地別組成をみると土師質土器が 30％と一番高い比率を示す（第 212 図）。土師質土器は第４遺構面では 62.9％と半数以上の高い比率であったが、本面には減少する。それとは逆に、備前焼は第４遺構面では 20％で本面は 25％とやや増加し、また、肥前陶器 36％が出現と共に高い比率を示しており、この時期には陶磁器が土師質土器に変

---

[7]神戸市教育委員会『兵庫津遺跡第 36 次発掘調査概要報告書 - 神戸市兵庫区北逆瀬川町におけるマンション建設に伴う発掘調査 -』2006 年

[8]兵庫津遺跡 38 次調査会『兵庫津 38　- 集合住宅建設に伴う兵庫津遺跡第 38 次発掘調査報告書 -』2006 年

わる遺物の主体となる。この時期に出現したものとして、肥前陶器以外には丹波焼、肥前磁器がある。

次に用途別組成をみると、食膳具 50%、貯蔵具 27%、調理具 18%、調度具 5%と続き（第 213 図）食膳具が一番高い比率を示す。ちなみに、第４遺構面では貯蔵具が 55%、食膳具 37%と貯蔵具が半数を占める。このことから、この時期に用途別組成の中心が貯蔵具から食膳具へ移行したことがわかる。

この要因としては、肥前陶器の出現が挙げられる。産地別組成で土師質土器 30%に続いて、肥前陶器が 36%出土する（第 212 図）。この肥前陶器の主な製品は食膳具の碗・皿であり、食膳具組成では全体の 66%（碗 26%、皿 38.9%、鉢 1.1%）を占める（第 214 図）。このことから、肥前陶器の碗・皿の出現により、前代まで土師質土器を中心とする遺物組成から、肥前陶器の食膳具を中心とする遺物組成へ変化したことが明らかである。

貯蔵具は（第 216 図）、第４遺構面では出土しなかった丹波焼甕・壺[9]38%が出現し、備前焼甕・壺 41%と比率が拮抗する。また、甕・壺以外にも瓶類もこの時期から出現し、新たな産地・器種が加わる。調理具は土師質土器焙烙と陶器擂鉢に分けられる（第 215 図）。土師質土器焙烙はこの時期から出現し、調理具全体の 56%を占める。この組成は第４遺構面にみられた土師質土器鍋と同様で、この時期には土師質土器鍋が出土していないことから、土師質土器鍋類は鍋から焙烙へ移行したことがわかる。擂鉢は備前焼擂鉢 26%と、この時期から丹波焼擂鉢 18%が加わる。備前焼擂鉢は乗岡編年近世１b 期[10]（17 世紀初頭）のものが中心で、近世２期（17 世紀前期）の製品はごく僅かに含まれる程度であった。丹波焼擂鉢は、擂目をみると 16 世紀末～17 世紀初頭に多くみられる１本引き擂目（第 236 図－9）と、17 世紀前期以降に出現する櫛目描き（第 236 図－10・11）のものがあり、比率的には櫛目描きの方が多い。このことから擂鉢の主体は、17 世紀前期以降に備前焼擂鉢から丹波焼擂鉢へ移行したと考えられる。

食膳具は先にも述べたが、肥前陶器碗・皿が大半を占める（第 214 図）。この他には、土師質土器皿 23%、瀬戸美濃陶器碗２%、瀬戸美濃陶器皿３%、肥前陶器碗 12%、肥前陶器皿１%、肥前陶器鉢１%、中国製磁器碗 0.2%、中国製磁器皿 0.8%、朝鮮王朝陶磁器碗 0.1%、肥前磁器碗 1.9%、肥前磁器皿３%という組成であった。比率が一番高い肥前陶器碗・皿のタイプは絵唐津は含まず、無文で皿の見込みには目痕が残る量産品が

[9]本来は甕・壺と分類すべきだが、これらの区別ができる口縁部の残存状況が悪いため今回は一括にまとめた。
[10]乗岡実「備前焼擂鉢の編年について」『第３回中近世備前焼研究会』発表要旨　中近世備前焼研究会 2000 年

中心である（第 236 図－36・37・39）。また、瀬戸美濃陶器碗・皿には志野焼や織部焼などの「桃山陶器」と呼ばれるものはなく、無文で灰釉を施した量産品が中心であった（第 236 図－21・23）。

第２遺構面（18 世紀後期～19 世紀前期）

第２遺構面の産地別組成は（第 212 図）、土師質土器 32%、備前焼 0.5%、丹波焼 1%、堺・明石焼６％、瀬戸美濃陶器２％、肥前陶器 8%、京焼系陶器 11.8%、肥前磁器 38%、瀬戸美濃磁器 0.9%、京焼系磁器 0.1%に分かれる。この時期でも土師質土器が高い比率を示すが、破片分析という性格上、焙烙など破損しやすいものの数値が高く出るためで、個体数値では肥前磁器 52%で主体なのがわかる。

用途別組成は（第 213 図）、食膳具 70%、調理具 18%、貯蔵具４％、調度具８％と、第３遺構面と比べると貯蔵具はさらに激減し、その分、食膳具の比率が高くなる。その一方で、調理具 18%、調度具８％と第３遺構面と大きな変化はなかった。

個別の状況は、貯蔵具組成は土師質土器甕４％、備前焼瓶類４％、丹波焼甕・壺 74%、丹波焼瓶 18%と丹波焼甕・壺が大半を占める（第 216 図）。17 世紀前期以降に備前焼甕・壺から丹波焼甕・壺に主体が移行するが、この時期に至ると丹波焼甕・壺がほぼ独占する。備前焼甕・壺は出土していないが瓶類はみられる。この備前焼瓶類は「伊部手」と呼ばれるタイプである。調理具組成は（第 215 図）、土師質土器焙烙 60%、丹波焼擂鉢３％、堺・明石焼擂鉢 17%、京焼系陶器土瓶・急須４％、京焼系陶器土鍋・行平 16%に分かれる。土師質土器焙烙がこの時期でも中心である。それ以外の組成には変化がある。16 世紀末～17 世紀中期まで擂鉢の中心であった備前焼擂鉢は姿を消し、丹波焼擂鉢も激減する。これらに変わって高い比率を示すのが堺・明石焼擂鉢である。この時期には堺・明石焼擂鉢が擂鉢の主体となる。また、陶器の土鍋・行平[11]、土瓶・急須が出現し、調理具にバリエーションがみられる。

調度具組成は、器種に変化がみられる（第 217 図）。土師質土器灯火具 8%、土師質土器火鉢 11%、土師質土器焜炉類 44%、土師質土器壺 0.4%、土師質土器その他 0.6%、瓦質土器火鉢２％、軟質施釉陶器灯火具 20%、京焼系陶器灯火具７％、瀬戸美濃陶器神仏具１％、

[11]土鍋・行平の大きく異なる特徴は、これらに伴う蓋にあり、土鍋は木蓋、行平は陶器蓋が伴う。そのため、土鍋の場合は口縁部が施釉されているが、行平の場合は無釉であり、この特徴で区別するのだが、鍋類に分類したものは口縁部まで残っているものが少なかったので、どちらの可能性もあるので「土鍋・行平」と表示した。

肥前陶器神仏具１％、肥前磁器神仏具２％、肥前磁器化粧具 1.5%、肥前磁器文具 1.5%と、第３遺構面と比べると器種にバリエーションがみられる。灯火具だけでも軟質施釉陶器や京焼系陶器など新たな産地が加わる。器形も第３遺構面では皿のみであったが、脚付きの灯明皿や秉燭などの器種が増え、用途に応じて使い分けしたことが察し得る。この他には、焜炉類や火鉢、また僅かではあるが、仏飯具・仏花瓶・香炉などの神仏具、化粧具もこの時期から出現する。

食膳具組成は（第 214 図）、土師質土器皿 6%、丹波焼鉢 5%、肥前陶器碗１％、肥前陶器鉢１％、京焼系陶器碗９％、中国製磁器皿 0.5%、肥前磁器碗 58%、肥前磁器皿 15%、肥前磁器その他１％、瀬戸美濃磁器碗・皿２％、京焼系磁器皿・鉢１％と、肥前磁器碗が半数を占め、碗以外の皿や鉢・小坏（その他）などを加えると７割近くが肥前磁器である。産地別組成で（第 212 図）この肥前磁器が半数を占めていたが、主製品は食膳具の碗・皿である。肥前磁器碗・皿の主なタイプは「くらわんか手」と呼ばれる量産品で（第 236 図－69～72）、これらを多く受容することにより、肥前磁器の比率が高くなったと考えられる。但し、量産品の碗・皿を多く受容するが、有田町で生産された高級品の碗・皿も含まれる。これらの割合は碗が８（量産）：１（高級）、皿は９（量産）：１（高級）というもので、高級品は僅かであった。この他の特徴として、個々の量は少ないが、肥前磁器碗以外にも瀬戸美濃陶器碗や京焼系陶器碗など碗の産地にバリエーションがあり、使用目的に応じて使い分けしたと考えられる。

第１遺構面（19 世紀中期以降）

産地別組成は（第 212 図）、土師質土器４％、備前焼１％、丹波焼２％、堺・明石焼 18%、瀬戸美濃陶器 0.5%、萩焼 0.5%、京焼系陶器 21%、肥前磁器 46%、瀬戸美濃磁器４％、京焼系磁器２％と続く。新たな産地として萩焼が出現する。第２遺構面と比べて、肥前磁器はこの時期でも大半を占める。その他には、土師質土器は激減し、逆に京焼系陶器、堺・明石焼、瀬戸美濃磁器などが増加する。用途別組成は（第 213 図）、第２遺構面と大きな変化はみられず、この時期でも食膳具が 69%と大半を占める。

貯蔵具組成は（第 216 図）、第２遺構面までみられた土師質土器甕は姿を消し、新たに徳島県で生産された大谷焼甕が出現する。この大谷焼甕は比率的にも丹波焼甕・壺と二分する組成となっており、出現と共に一気に多く受容されたことが窺える。瓶類はこの時期でも備前焼、丹波焼があり、第２遺構面と大きな変化はない。調理具組成は（第 215 図）、

第２遺構面と器種の増減はないが、量比に変化がある。第２遺構面まで調理具の中心であった土師質土器焙烙８％は激減し、堺・明石焼擂鉢 36%と京焼系陶器土鍋・行平 38%が中心となり、調理具も他の用途と同様に材質が陶器主体へ変化する。調度具の灯火具は、第２遺構面と比べると土師質土器灯火具は 0.1%、軟質施釉陶器灯火具は５％と激減し、京焼系陶器灯火具が 19%と中心となる（第 217 図）。この他の土師質土器火鉢 24%・焜炉類 38%は多少の増減はあるものの、この時期に至っても調度具の中心である。神仏具８％、化粧具５％、文具２％については僅かではあるが増加する。

食膳具組成は（第 214 図）、土師質土器皿 0.5%、瀬戸美濃陶器碗 0.5%、萩焼碗 0.5%、京焼系陶器碗４％、中国製磁器皿２％、肥前磁器碗 64.5%、肥前磁器皿 14%、肥前磁器その他４％、瀬戸美濃磁器碗・皿６％、京焼系磁器皿・鉢４％が出土する。この時期に至っても中心は肥前磁器碗である。土師質土器皿は 0.5%と僅かに含まれる程度で、逆に瀬戸美濃磁器碗・皿６％や京焼系磁器皿・鉢３％などは、第２遺構面より増える。このことから、第１遺構面の食膳具は主に磁器製の食膳具を受容する。また、肥前磁器碗・皿の品質については、この時期に至っても、「くらわんか手」とよばれる量産品が中心であるが、碗は７（量産）：３（高級）、皿は１（量産）：１（高級）と第２遺構面と比べて高級品の割合が多くなる。

第２次地点では、産地別組成は第４遺構面（15 世紀後期以前～16 世紀前期）では土師質土器を中心としたが、第３遺構面の 16 世紀末～17 世紀中期に至ると肥前陶器が、18 世紀後期～19 世紀前期の第２遺構面以降は肥前磁器が中心であり、常に国産の土器・陶磁器が主体であった。

用途別組成については、15 世紀後期以前～16 世紀前期までは貯蔵具が中心であったが、16 世紀後期～17 世紀中期以降は食膳具が常に高い比率を占めていた。食膳具の比率が増加した要因として、肥前陶器の食膳具の急増と関係する。この肥前陶器の器種は碗・皿で、無文で見込みに目痕を残す量産品が多く、これを多く受容することによって急増したと考えられる。すなわちこの現象は、陶器の食膳具を日用器として受容することを意味する。

この後、第２遺構面の 18 世紀後期～19 世紀前期でも、肥前陶器と同様な傾向が肥前磁器でも見られる。それは肥前磁器の「くらわんか手」とよばれる量産品の碗・皿で、この時期には肥前陶器の量産品に変わり、肥前磁器の量産品を日用器として受容したと考えられる。また、食膳具の多くは量産品であり、第３遺構面（16 世紀末～17 世紀中期）では志野焼や織部焼のような「桃山陶器」と呼ばれるものは出土しないが、第２遺構面の 18

世紀後期～19 世紀中期に至ると、若干ではあるが有田町で生産された肥前磁器の高級碗・皿が含まれ、その比率は第１遺構面（19 世紀中期）ではさらに高くなる。

②　第 14 次地点の土器・陶磁器の様相

第 14 次地点は七宮町に位置する[12]（第 211 図－14）。本地点は『摂州八部郡福原庄兵庫津絵図』、『摂津国八部郡兵庫津絵図』などの絵図から、兵庫津の中心部にあたる。発掘調査において 9 世紀～19 世紀代の遺構・遺物を検出し、遺構面は 14 世紀～19 世紀にわたる８面があると考えられている。町屋遺構は 15 世紀後期～16 世紀前期が古く、それ以降、19 世紀代までの町屋遺構が検出されている。

各遺構面の年代は、第８遺構面は 13 世紀後期～14 世紀前期、第７遺構面は 14 世紀代、第６遺構面は 16 世紀前期まで、第５遺構面は 16 世紀後期まで、第３・４遺構面は 16 世紀末～17 世紀前期、第２遺構面は 17 世紀後期～18 世紀前期、第１遺構面は 18 世紀中期～18 世紀後期である。なお、第３・４遺構面は慶長元年（1596）の震災面、第２遺構面は宝永５年（1708）の火災面である。

先にも述べたが、今回対象としたのは 16 世紀末以降の資料に限定しているため、第３・４遺構面より上層の資料を分析した。では、その分析結果を遺構面ごとに検討する。

第３・４遺構面（16 世紀末～17 世紀前期）

産地別組成は（第 218 図）、土師質土器 32%、肥前陶器 24%、備前焼 18%、丹波焼 13%、瀬戸美濃陶器 5.5%、中国製磁器 5.5%、東播系須恵器２%、瓦質土器 0.5%で、土師質土器が一番多く出土し、これに肥前陶器、備前焼が続く。用途別組成は（第 219 図）、食膳具 43%、調度具４%、貯蔵具 37%、調理具 16%となり、食膳具が半数近い比率を示し、これに貯蔵具、調理具が続く。

まず、貯蔵具の主な器種は、甕・壺と瓶類である（第 222 図）。組成は土師質土器甕４%、東播系須恵器甕１%、備前焼甕・壺 52%、丹波焼甕・壺 35%、備前焼瓶類５%、丹波焼瓶類１%、肥前陶器瓶類２%で、備前焼甕・壺が 52%と半数を占める。備前焼甕・壺のタイプは、乗岡編年の中世６期ａ・ｂのものを含むが、中心は近世１期ａの甕・壺である。調理具の主な器種は鍋・羽釜と擂鉢である（第 221 図）。鍋・羽釜の種類は土師質土器で、

[12] １と同じ。

調理具全体の 61%と半数以上を占める。擂鉢は備前焼擂鉢 26%、丹波焼擂鉢 12%、肥前陶器擂鉢１%である。それぞれの特徴は、備前焼擂鉢は乗岡編年の近世１期のもの、丹波焼擂鉢は 16 世紀末～17 世紀初頭に出土する擂目が１本引きのもののみで、17 世紀前期に出現する櫛目描きの擂目のものは含まれない。調度具は土師質土器灯火具が 95%と大半を占め、その他に土師質土器火鉢３%、土師質土器焜炉２%がある（第 223 図）。

食膳具の主な器種は皿と碗である。その組成は土師質土器皿 30%、丹波焼鉢４%、瀬戸美濃陶器碗 1.5%、瀬戸美濃陶器皿 6.5%、肥前陶器碗８%、肥前陶器皿 37%、中国製磁器碗５%、中国製磁器皿７%、朝鮮王朝陶磁器碗１%である（第 220 図）。肥前陶器（碗８%・皿 37%）が半数近くあり、それに土師質土器皿、中国製磁器碗・皿などが続く。一番多く出土する肥前陶器碗・皿は、無文で皿の見込みには胎土目や砂目などの目痕を残す量産品が大半を占める。また、瀬戸美濃陶器碗・皿も志野焼や織部焼などの「桃山陶器」と呼ばれるものは含まれず、無文の量産品が中心である。

第２遺構面（17 世紀後期～18 世紀前期）

産地別組成は（第 218 図）、土師質土器 30%、備前焼 0.2%、丹波焼 6%、瀬戸美濃陶器 0.2%、肥前陶器 4.4%、中国製磁器２%、肥前磁器 57.2%で、第３・４遺構面で中心であった肥前陶器は激減し、それに変わって肥前磁器が土器・陶磁器の中心となる。さらに、陶器についても第３遺構面では備前焼が中心であったが、この時期に至ると丹波焼へ逆転しており、産地別組成に変化がみられた。用途別組成は（第 219 図）、食膳具 64%、調理具 28%、貯蔵具３%、調度具５%で、第３・４遺構面と同様に食膳具が一番多く、第３・４遺構面よりさらに比率が高くなる。その一方、第３・４遺構面で食膳具に次いで高い比率を示した貯蔵具は３%に激減する。その他の調理具、調度具には大きな変化はみられなかった。では、個別に状況を検討する。

貯蔵具組成は（第 222 図）、土師質土器甕 38%、備前焼瓶１%、丹波焼甕・壺 61%、丹波焼瓶１%、肥前陶器瓶類１%で、丹波焼甕・壺が中心である。調理具の主な器種は焙烙と擂鉢で（第 221 図）、組成は土師質土器焙烙 62%、備前焼擂鉢２%、丹波焼擂鉢 30%、堺・明石焼擂鉢２%、肥前陶器擂鉢４%である。第３遺構面と同様に土師質土器鍋類が 62%を占め、擂鉢は第３・４遺構面で一番高い比率であった備前焼擂鉢は激減し、それに変わって丹波焼擂鉢が独占しており、擂鉢の主体が備前焼から丹波焼へ変わる。調度具は（第 223 図）、土師質土器灯火具 58%、土師質土器焜炉 13%、肥前磁器神仏具 14%、肥前磁

器化粧具 15%で、新たな器種として肥前磁器神仏具・化粧具が加わる。

食膳具組成は（第 220 図）、土師質土器皿３%、肥前陶器碗 6.5%、肥前陶器皿９%、肥前陶器鉢３%、中国製磁器皿４%、肥前磁器碗 52.5%、肥前磁器皿 22%に分かれる。肥前磁器碗が 52.5%と半数を占め、これに皿 22%を加えると全体の 74.5%となり肥前磁器が大半を占める。第３・４遺構面では食膳具の主体は肥前陶器碗・皿であったが、この時期から肥前磁器碗・皿へ主体が移行する。肥前磁器碗・皿の主なタイプは「くらわんか手」と呼ばれる量産品の碗・皿で、第２遺構面でも変わらず量産品の碗・皿を主に受容する。しかし、量産品を主に受容するが僅かに有田町で生産された肥前磁器の高級製品（碗は 52.5%中 18%、皿は 22%中 11%）も含まれる。

第１遺構面（18 世紀中期～18 世紀後期）

産地別組成は（第 218 図）、土師質土器 30%、備前焼 0.2%、丹波焼５%、堺・明石焼 0.8%、肥前陶器 10%、肥前磁器 54%に分かれる。ここでも肥前磁器が高い比率を占める。用途別組成は（第 219 図）、食膳具 75%、調度具 2.8%、貯蔵具 4.2%、調理具 18%と、第２遺構面よりさらに食膳具の比率が高くなる。その他は調理具がやや減少するものの、第２遺構面と大きな差異はない。

貯蔵具組成は（第 222 図）、丹波焼甕・壺 81%、丹波焼瓶 19%となり、第２遺構面で出土した土師質土器甕、備前焼瓶類はなく、丹波焼製品が独占する。調理具組成は（第 221 図）、土師質土器焙烙 62%、備前焼擂鉢３%、丹波焼擂鉢 32%、堺・明石焼擂鉢 1.5%、肥前陶器擂鉢 1.5%で、第２遺構面と大きな変化はない。調度具組成は（第 223 図）、土師質土器灯火具６%、土師質土器火鉢 25%、土師質土器焜炉 27%、軟質施釉陶器灯火具 27%、肥前磁器神仏具 6%、肥前磁器化粧具 3%、肥前磁器文具４%に分かれる。前代まで、調度具の中心であった土師質土器灯火具は６%と激減し、これに変わり、新たに軟質施釉陶器灯火具が加わり、灯火具の中心となることから、この時期に、主体が土師質土器灯火具から軟質施釉陶器灯火具へ移行したことがわかる。また、肥前磁器の神仏具・化粧具は第３・４遺構面より減少するが、これは土師質土器の火鉢や焜炉の破損が激しかったため破片数が多く現れたためで、個体数では前代と大きな変化はみられない。また、この面から肥前磁器文具が加わり、主な器種は水滴である。

食膳具組成は（第 220 図）、土師質土器皿２%、肥前陶器碗 7.5%、肥前陶器皿 2.5%、肥前陶器鉢３%、京焼系陶器碗 1.5%、中国製磁器皿 1.5%、肥前磁器碗 58.5%、肥前磁器

皿 21%と、第２遺構面よりさらに肥前磁器碗・皿の比率が上がり、産地別組成において、肥前磁器が高い比率を示したのは、食膳具碗・皿の増加に要因があることがわかる。肥前磁器碗の主なタイプは第２遺構面と同様に「くらわんか手」と呼ばれる量産品が中心であり、第１遺構面よりさらに日用器として使用されたことがわかる。また、「くらわんか手」の碗以外に、瀬戸美濃陶器碗や京焼系陶器碗、肥前磁器筒型・丸碗などは口径 10cm 前後で、大きさがよく似ており使用時に選択して使用したことが読み取れる。また、この時期でも有田町で生産された肥前磁器の高級品碗が 18%含まれる。この他、肥前陶器碗・皿は、タイプをみると 17 世紀初頭の胎土目積みのものが大半で伝世品と思われる。

第 14 次地点は、産地別組成は 16 世紀末～17 世紀前期の第３・４遺構面では肥前陶器、17 世紀中期～18 世紀前期の第２遺構面では肥前磁器が中心となり、常に国産の陶磁器が主体であった。用途別組成でも食膳具が高い比率であり、それは時代の経過とともにその比率が高くなり、日用器として陶磁器の食膳具の受容が多くなったことがわかる。これら食膳具の碗・皿は量産品を主に受容するが、有田町で生産された肥前磁器の高級品の碗・皿も含まれる。食膳具以外で、貯蔵具は、16 世紀末～17 世紀前期は備前焼甕・壺、17 世紀中期以降は丹波焼甕・壺が中心である。調理具は、用途別組成において常に 18%前後の比率を示し、その主な器種は土師質土器焙烙と陶器の擂鉢を中心とするものであった。調度具も用途別組成については常に５%前後で出土する。この主な器種は土師質土器の灯火具と火鉢で、これらは時代を通してみられた。また、第２遺構面からは化粧具や文具などの調度具も一定量出土していた。

③　第 36 次地点の土器・陶磁器の様相

第 36 次地点は、兵庫津遺跡の北西部に位置する北逆瀬川町に位置する（第 211 図－36）。昭和 38 年（1963）まで寺院（長楽寺）が建っていたところで、その開基は文献資料によると延慶元年（1308）とあるが定かでなく、元禄５年（1692）に大坂町奉行所へ提出した写しがあり、この頃にはあったことがわかっており、その存在は明和６年（1769）、安政４年（1857）の絵図に描かれている。

発掘調査おいては[13]、古代、中世末、17 世紀後期～19 世紀代の遺構を検出し、特に 17 世紀後期～19 世紀代の遺構・遺物は寺院に関係する墓地跡や墓票、遺物が出土する。遺構

[13] 7 と同じ。

面は４面を検出し、各遺構面の年代は第４・３遺構面 15 世紀代、第２・１遺構面 17 世紀後期～19 世紀代である。

今回、対照とする 16 世紀末以降の遺構として第２・１遺構面に属するものだが、出土遺物の大半が第２遺構面の SX01 からであるため、本遺構のみ分析した。

SX01(18 世紀中期～18 世紀後期[14])

産地別組成をみると（第 224 図）、土師質土器 29%、瓦質土器４%、備前焼 1.7%、丹波焼 10%、信楽焼 0.3%、堺・明石焼５%、軟質施釉陶器 2.7%、瀬戸美濃陶器３%、肥前陶器 3.3%、京焼系陶器５%、肥前磁器 36%という組成である。このなかで肥前磁器 36%が一番高い比率で、これに土師質土器が 29%と続く。焼締陶器は、丹波焼が 10%と一番高い比率であるが、備前焼、堺・明石焼、信楽焼と多くの産地がみられる。その組成は施釉陶器も同じで京焼系陶器を筆頭に肥前陶器、瀬戸美濃陶器など各地の製品が出土する。用途別組成は食膳具 39%、調理具 17%、貯蔵具８%、調度具 36%と食膳具と調度具が拮抗する組成である（第 225 図）。では、個別に状況を見てみる。

貯蔵具は（第 228 図）、丹波焼甕・壺 96%、信楽焼甕１%、瀬戸美濃陶器鉢類３%と丹波焼甕・壺が大半を占める。調理具の主な器種は焙烙・擂鉢・徳利に分けられる（第 227 図）。その組成は土師質土器焙烙 33%、土師質土器焼塩壺 1.4%、瓦質土器羽釜 1.2%、丹波焼擂鉢 0.4%、丹波焼鉢類５%、丹波焼徳利 10%、堺・明石焼擂鉢 37%、肥前陶器片口 1.5%、肥前陶器徳利 0.8%、京焼系陶器片口 0.4%、京焼系陶器土瓶・急須４%、京焼系陶器土鍋・行平 4.2%である。堺・明石焼擂鉢 37%と土師質土器焙烙 33%が競合する組成で、18 世紀後期以降に近畿の近世遺跡で急増する京焼系陶器煮沸具もわずかではあるが出土する。調度具組成は（第 228 図）、土師質土器灯火具 24.9%、土師質土器焜炉類 17%、瓦質土器火鉢６%、瓦質土器焜炉 5.8%、軟質施釉陶器灯火具 19%、肥前磁器神仏具 4.3%、肥前磁器化粧具 2.8%と続き、さまざまな用途の製品があり、比率は低いが丹波焼植木鉢 0.8%・火入れ１%などの嗜好品も出土する。これら調度具で高い比率なのが土師質土器・軟質施釉陶器の灯火具で、これらの大半は皿であり（土師質土器内 24%、軟質施釉陶器内 18%）、軟質施釉陶器には受皿・有脚灯明台も１%とごく僅かではあるが含まれる。灯火具はこれら産地以外に備前焼灯火具 1.3%、瀬戸美濃陶器灯火具 0.3%、京焼系陶器灯火具

[14]SX01 の年代観であるが、調査報告によると 18 世紀代～19 世紀初頭とされている。遺物を実見、分析したところ、陶磁器の特徴、組成から 1780 年代に出現する肥前磁器広東碗がごく僅かであること、そのタイプが初期のものであること。また、肥前磁器碗の中心が 18 世紀中期に多く出土する望料碗を中心とすることや、京焼系陶器の土瓶の注ぎ口が鉄砲口を含まないことなどから 18 世紀中期～後期と位置づけた。

0.5%があり、すべて皿で、先の産地と比べると僅かではあるが多産地の灯明皿を使用する。この状況は灯明皿に限らず神仏具も同様で、丹波焼 0.9%、瀬戸美濃陶器 0.6%、肥前陶器 1.3%、京焼系陶器 1.3%、肥前磁器 4.3%の製品が出土する。仏飯具は瀬戸美濃陶器 0.6%、肥前磁器３%、香炉は肥前陶器 1.3%、肥前磁器 1.3%、仏花瓶は丹波焼 0.9%、京焼系陶器 1.3%などにわかれ、用途に応じて産地を使い分けする。

最後に食膳具は（第 226 図）、土師質土器皿 6.7%、瀬戸美濃陶器碗６%、瀬戸美濃陶器皿２%、肥前陶器碗 0.7%、肥前陶器鉢４%、京焼系陶器碗 7.4%、中国製磁器碗 0.1%、中国製磁器皿 0.1%、肥前磁器碗 52%、肥前磁器皿 18%、肥前磁器その他３%の組成である。肥前磁器碗が 52%と半数を占め、それに肥前磁器皿が 18%と続く。

碗類は食膳具の 67.2%と半数以上をこれが占める。碗類は口径 15～10cm の碗と口径 10cm 未満の碗に大別される。口径 15～10cm は「くらわんか手」碗、蓋をともなう肥前磁器望料碗・朝顔型碗などの肥前磁器碗が多く、個別でもこれらが高い比率を示す。一方、口径 10cm 未満の碗は京焼系陶器丸碗・筒型碗、肥前磁器筒型碗・小丸碗などで、器形・材質・装飾は多種に及ぶ。また、口径 15～10cm の碗と口径 10cm 未満の碗との比率であるが３：２と大差はみられない。

皿は碗に比べると碗８に対して皿２と少ない。製品は肥前磁器皿が 80%を示し、その多くは長崎県波佐見町周辺の窯で生産された量産品が中心である。高級品との比率は高級品１に対して量産品９と後者が圧倒的に多い。

第 36 次地点の 18 世紀中期～後期は、産地別組成は肥前磁器を中心とし、土師質土器、丹波焼などの国産土器・陶磁器が中心であった。用途別組成は食膳具と調度具が拮抗し、調理具、貯蔵具の比率は低い。食膳具の中心は量産品の碗に、肥前磁器の蓋付き碗があり、器形・材質・装飾は多種にわたる。特に口径 10cm 未満の碗を多く受容し、さらに、これらの碗は同文様のものが少ないが、器形・法量的に二分され、目的に応じるためにこの法量を選択したことが察し得る。食膳具以外は、貯蔵具は丹波焼が大半を占め、器種も徳利が多く出土する。調度具は灯火具が高い比率で、土師質土器を中心とするが備前焼、瀬戸美濃陶器、京焼系陶器など多産地の製品がみられた。

④　第 38 次地点の土器・陶磁器の様相

第 38 次地点は、兵庫津の北部の西大路町に位置する（第 211 図－38）。『摂州八部郡福原庄兵庫津絵図』によると浄土宗西光寺の境内及び門前町の一部に当たることがわかって

いる。発掘調査では古代から 20 世紀の遺構・遺物が出土し、遺構面は５面検出する。各遺構面の年代は、第４遺構面 13 世紀前期～14 世紀初頭、第４面上層 17 世紀中期～17 世紀後期、第３面 17 世紀後期～18 世紀前期、第２面 18 世紀後期、第１面 19 世紀後期～20 世紀前期である[15]。今回対象としたのは 16 世紀末以降であるが、遺物の数量・組成的に良好な遺構があった第２・３面に属する遺構のみを分析した。以下、その分析結果ごとに検討する。

第３面

この面に伴う遺構として 200－HO がある。検出地点は寺院境内と門前町屋の境に位置する廃棄土坑であるが上層からの掘り込みも多く、混入品と考えるものもあったが、17 世紀中期～18 世紀前期にまとまりがある。

この遺構の産地別組成をみると（第 230 図）、土師質土器 62.7%、瓦質土器１%、東播系須恵器 0.3%、備前焼２%、丹波焼 11%、信楽焼 0.1%、堺・明石焼 0.2%、軟質施釉陶器 0.5%、瀬戸美濃陶器４%、肥前陶器 5.9%、京焼系陶器 5.2%、肥前磁器 12%に分かれる。土師質土器が 62.7%と高い比率を示すが、破片計測という性格上、焙烙など破損しやすいものの数値が高く現れるためで､全体の組成比としては肥前磁器と丹波焼が競合する。用途別組成は（第 230 図）、食膳具 38%、調理具 55%、貯蔵具３%、調度具４%に分かれる。調理具が高い比率であるが、個体数では食膳具が半数近い比率を示す。調理具の比率が高い原因は、先にも触れたが破損しやすい土師質土器焙烙の数値によるものである。

貯蔵具は（第 234 図）、東播系須恵器甕２%、備前焼壺・甕 15%、備前焼瓶類７%、丹波焼壺・甕 51%、丹波焼瓶類 23%、信楽焼甕２%と丹波焼が主体である。調理具は（第 233 図）、土師質土器焙烙 81%が先に述べたとおりに多い。これ以外は備前焼擂鉢 0.7%、丹波焼擂鉢 14%、丹波焼鉢 2.2%、堺・明石焼擂鉢 0.1%、瀬戸美濃陶器擂鉢 0.9%、京焼系陶器土瓶 0.5%と擂鉢が多い。

調度具は（第 235 図）、土師質土器製品が中心で、土師質土器灯火具 10.8%、土師質土器火鉢４%、土師質土器焜炉類１%、瓦質土器火鉢３%、軟質施釉陶器灯火具 63%、軟質施釉陶器化粧具 1%、備前焼灯火具 0.2%、京焼系陶器火鉢８%、京焼系陶器神仏具１%、京焼系陶器その他１%、肥前磁器神仏具１%、肥前磁器その他６%という組成である。灯

[15] ８と同じ。

火具と火鉢・焜炉類を中心に、それに神仏具と化粧具が加わる。

食膳具は(第 232 図)、肥前磁器碗が 37%と高い比率を示し、この他に土師質土器皿７%、瓦器椀 0.8%、瀬戸美濃陶器碗１%、瀬戸美濃陶器皿 1.1%、瀬戸美濃陶器鉢 2.5%、肥前陶器碗 20.6%、肥前陶器皿 0.7%、肥前陶器鉢 5.2%、京焼系陶器碗５%、京焼系陶器鉢 1.5%、肥前磁器皿 17%、肥前磁器鉢１%、肥前磁器その他 1.7%という組成ある。肥前陶器碗 20%、肥前磁器皿 17%が肥前磁器碗に次いで高い比率で、このことから肥前陶磁器の食膳具が中心であることがわかる。この肥前磁器碗であるが、有田町で生産されたものは少なく、長崎県波佐見町周辺の窯跡で生産された量産品が中心で、その割合は量産４：高級１である。これは皿も同じで、内面に蛇ノ目釉ハギされた量産４：高級１という割合である。

第２面

332－HS はこの遺構面に伴い、検出地点は門前町屋に位置する廃棄土坑である。産地別組成は（第 230 図)、土師質土器５%、瓦質土器 6.1%、軟質施釉陶器７%、備前焼 6.1%、丹波焼４%、堺・明石焼６%、瀬戸美濃陶器３%、肥前陶器１%、萩焼 2.4%、京焼系陶器 32%、肥前磁器 16%という組成である。京焼系陶器が 32%と一番高い比率を示す。これは土瓶・急須・土鍋の破片数の影響によるもので、主体は肥前磁器と拮抗する組成である。用途別組成は（第 231 図)、食膳具 17%、調理具 47%、貯蔵具 10%、調度具 26%となる。京焼系陶器調理具の影響により高い比率だが、個体数では食膳具の比率がもう少し高い。ただ、前代まで５%未満であった貯蔵具や調度具は京焼系陶器調理具の影響により偏りはあるものの前代より比率を上げる。個別に状況を見てみる。

貯蔵具は（第 234 図)、備前焼甕・壺６%、備前焼瓶類 64%、丹波焼甕・壺 15%、瀬戸美濃陶器鉢１%、肥前陶器瓶類 13%、京焼系陶器瓶１%である。下層では貯蔵具は壺・甕を中心としたが、ここでは瓶類が主体となり、この時期に用途別組成で貯蔵具が前代より比率を上げる要因は瓶類の受容の増加による。調理具は(第 233 図)、土師質土器鍋 0.6%、土師質土器焙烙 10%、土師質土器焼塩壺 0.6%、瓦質土器羽釜 0.2%、備前焼擂鉢 0.2%、丹波焼擂鉢１%、丹波焼鉢 0.5%、堺・明石焼擂鉢 12.5%、軟質施釉陶器鍋 0.6%、軟質施釉陶器鉢 0.4%、京焼系陶器急須・土瓶 43%、京焼系陶器土鍋・行平 29.3%である。第３面で高い比率を示した焙烙は 10%まで激減し、これに変わるように施釉陶器の鍋類が急増し高い比率を示す。その一方で、擂鉢は堺・明石焼を中心とし比率も前代と大きな変化は

みられない。

食膳具組成は土師質土器皿 18%、瀬戸美濃陶器碗９％、瀬戸美濃陶器皿 0.5%、肥前陶器碗２％、肥前陶器皿１％、肥前陶器鉢３％、萩焼碗 2.5%、萩焼皿５％、京焼系陶器鉢 24%、肥前磁器碗 34%、肥前磁器皿２％である（第 232 図）。肥前磁器碗が 34%と一番高い比率を示す。品質は量産３：高級１と依然として量産品を中心とする組成に変わりないが、前代より高級品の割合が増える。調度具は軟質施釉陶器灯火具 32%、瓦質土器焜炉類 28.2%が高い比率で、前代と同様に灯火具と焜炉類を中心とする組成である。これ以外の特徴としては、丹波焼植木鉢 0.5%、肥前磁器化粧具 3.5%などの嗜好品の比率が高くなる。

第 38 次地点は、産地別組成は江戸時代を通して肥前磁器、土師質土器を中心とすることから、常に国産の土器・陶磁器が主体であった。用途別組成は破片数計測のため調理具が時代を通して高い比率であったが、個体数値では食膳具が同率かやや上回る様相である。食膳具の中心は肥前磁器碗で、これを主に受容する。肥前磁器碗は量産品を主体とするが、18 世紀後期には高級品の比率が上昇していた。貯蔵具は 18 世紀後期以前までは５％未満と低い比率で、主な製品は丹波焼壺・甕類であった。調理具は時代を通して用途別組成において高い比率であった。18 世紀後期までは焙烙を中心とし、これに擂鉢が続き、18 世紀後期以降は土師質土器焙烙から京焼系陶器土鍋・行平、徳利へ主体を移行するが、擂鉢は時代を通して 10%と変化なく受容される。最後に調度具であるが主体は灯火具と焜炉類だが、18 世紀後期に至ると化粧具や植木鉢などの嗜好品が増加する。

４　第２・14・36・38 次地点の土器・陶磁器の様相差

第２・14・36・38 次地点の土器・陶磁器の様相を述べた。ここでは、これら４地点の様相を時期ごとに比較したいと思う。

①　16 世紀末～17 世紀中期

この時期の資料として、兵庫津の周辺部の町屋[16]にあたる第２次地点の第３遺構面、兵庫津の中心部の町屋にあたる第 14 次地点の第３・４遺構面がある[17]。産地別組成をみると

[16] この時期の第２次地点でははっきりとした町屋資料は検出されていないが、掘立柱建物を数基検出しているため、本調査地点周辺に町場が形成されつつあると考えられる。
[17]第 14 次地点の第３遺構面の下限年代は 17 世紀前期である。

（第 212・218 図）、両地点ともに土師質土器が一番多く出土するものの、備前焼、肥前陶器などの国産陶器類を中心とする遺物組成は共通する。この時期の大坂城跡や堺環濠都市遺跡などの大都市では貿易陶磁器が陶磁器の中でも高い比率を示すが、兵庫津の中心部の第 14 次地点では 5.5%、周辺部の第２次地点も５％と両地点ともに低く、これが兵庫津遺跡の実態といえるかもしれない。

用途別組成は、食膳具が第２次地点 50%、第 14 次地点 43%と半数近くを占め、これに貯蔵具、調理具、調度具が続く組成は共通する（第 213・219 図）。貯蔵具の組成も似ており、中心は備前焼甕・壺と丹波焼甕・壺が拮抗する（第 230・236 図）。調理具組成は土師質土器の鍋類を中心とし、備前焼擂鉢、丹波焼擂鉢が続く状況も共通する（第 215・221 図）。ただ、備前焼擂鉢と丹波焼擂鉢との比率が異なる。第２次地点では備前焼擂鉢 26%、丹波焼擂鉢 18%なのに対して、第 14 次地点では備前焼擂鉢 26%、丹波焼擂鉢 12%と第 14 次地点の丹波焼擂鉢の比率がやや低い。丹波焼擂鉢の特徴をみると、第２次地点では 17 世紀前期に出現する櫛目描き擂目をもつものが多いが、第 14 次地点では櫛目描きの擂鉢は含まれず、すべて 16 世紀後期～17 世紀初頭に出土する１本引き擂目の擂鉢のみである。第 14 次地点の第３・４遺構面の年代が 16 世紀末～17 世紀前期であるため、17 世紀前期以降に出現すると考えられる櫛目描き擂目の擂鉢は出土していなかったと思われる。これらの出土状況から、丹波焼擂鉢は櫛目描き擂目の擂鉢が出現する 17 世紀前半以降に増加することが明らかとなった。承応３年（1654）の篠山藩による窯座経営開始により、生産体制が整ったことから、生産・流通が改善され、17 世紀中期、各地へ大量に運ばれたと考えられる。兵庫津遺跡にみられた丹波焼擂鉢の状況は、窯場近郊ではそれ以前より増加しつつあることが明らかとなる。調度具は両地点とも土師質土器灯火具と火鉢であった（第 217・223 図）。

食膳具組成も大きな差異はみられず、肥前陶器碗・皿を中心に、土師質土器皿、瀬戸美濃陶器碗・皿などが続く（第 214・220 図）。品質は志野焼や織部焼に分類される「桃山陶器」の懐石具や茶器は含まず、肥前陶器の量産品の碗・皿が中心であった。両地点ともに、この時期には食膳具の比率が半数を占め、肥前陶器の量産品の碗・皿を多く出土するということは、兵庫津遺跡では 16 世紀末～17 世紀中期に肥前陶器の碗・皿を日用食器として受容したと思われる。このような状況は、16 世紀末～17 世紀前期にかけて瀬戸内海沿い及び日本海側の遺跡で同じような状況であることがわかっている。この時期の肥前陶器は、連房式登窯の導入や窯道具の改良により大量生産が可能になったこと、あわせて海運を利

用した流通路を確保したことにより、安価な製品を大量に各地へ流通することが可能になり、それにより各所で受容されたと考えられている[18]。兵庫津遺跡にみられる肥前陶器の状況は、これを裏付ける。

このことから、16 世紀末～17 世紀中期は、第 2 次地点、第 14 次地点ともに土器・陶磁器の様相は概ね同じであった。産地別組成は、貿易陶磁器は少なく備前焼、肥前陶器など国産陶磁器が中心であった。用途別組成では食膳具が大半を占め、その主な器種は肥前陶器の量産品の碗・皿であることから、これらを日用食器として受容したと考えられる。それ以外の用途別組成についても産地・器種別組成も共通する。貯蔵具は食膳具に続いて高い比率で、その主な器種は両地点とも備前焼甕・壺であった。調理具も共通し、土師質土器焙烙と備前焼・丹波焼擂鉢が受容されていた。調度具はその他の用途別組成に比べて少なかったが土師質土器の灯火具と火鉢が出土しており、必要最低限のものを受容したと考えられる。

② 17 世紀後期～18 世紀前期

この時期の資料として、兵庫津の中心部の町屋にあたる第 14 次地点の第 2 遺構面、兵庫津の北端にある寺院及び門前町屋にあたる第 38 次地点の 3 面 200－HO がある。産地別組成をみると（第 218・230 図）肥前磁器を中心とする組成は共通する。また、用途別組成についても、食膳具が 50%以上を占め、それに調理具、調度具、貯蔵具が続く組成も共通する（第 220・232 図）。貯蔵具組成は、第 14 次地点は丹波焼壺・甕 61%が高い比率で、これに土師質土器甕 38%と続き、貯蔵具の中心は壺・甕類であった。一方、第 38 次地点は肥前陶器瓶のみであった。ただ、同地点の同時期の遺構からは丹波焼甕・壺が出土しており、この時期の兵庫津遺跡の貯蔵具は丹波焼甕・壺が主体であることがわかる（第 222・234 図）。調理具組成は両地点ともに土師質土器焙烙が主体で、これに丹波焼擂鉢が続く組成は共通し、これが兵庫津遺跡の調理具の基本的な組成と考えられる（第 221・233 図）。この他に第 38 次地点では徳利は肥前陶器瓶類のみであった。第 14 次地点でもこれが 1 %出土するが、備前焼徳利 1 %、丹波焼徳利 1 %なども出土する。第 14 次地点では多産地の徳利を受容したことがわかる。

調度具は（第 223・235 図）、土師質土器灯火具が一番高い比率を示し（第 14 次地点 58%、

[18] 大橋康二『肥前陶磁』考古学ライブラリー55　ニュー・サイエンス社　1989 年

第 38 次地点 23%）[19]、これに土師質土器焜炉・火鉢などが続く組成は共通する。しかし、神仏具、化粧具の比率に受容差がある。化粧具は第 14 次地点が 15%、第 38 次地点は２％と大差がある。器種は第 14 次地点では油壺[20]、第 38 次地点は鬢水入れと器種が異なる。これらは江戸時代に結髪を整えるために必要なものであり、男女、身分に関係なく使用されていた。髪油は、椿油・くるみ油の他に、香を入れたものなどさまざまなものが使用される。陶磁器の壺以外に漆器や桶があり、『女用訓蒙図彙』（1687 年）には貝殻製品もみられる。鬢水入れも櫛で鬢水（水に五味子の茎を刻んで浸した粘水）を浸しやすいように小判型を呈するのが特徴であり、陶磁器以外に漆器がある。出土した陶磁器の化粧具は、女性が多く使用することを想定できるように、器面に染付や色絵で文様を施したものが多い。このことから、化粧具の受容差は身分や経済的格差というよりも、男女の比率や住人数などが大きく影響すると考えられる。

神仏具の各地点の詳細は、第 14 次地点は 14%（肥前磁器仏飯具４％、肥前磁器香炉 10%）、第 38 次地点は５％（京焼系陶器香炉３％、肥前磁器仏飯具２％）である。主器種は仏飯具・香炉を出土するが、第２次地点では仏花瓶も出土する。この組成は近郊の大坂城跡や伊丹郷町遺跡とも共通する。香炉・仏花瓶は仏壇前に飾られる三具足に属するものであり、兵庫津の町屋で祭壇が設けられたことがわかる。また、両地点の受容差であるが、複数の祭壇が設けられたとは考えられず、他地点も含めて、再度検討したいと思う。

食膳具は（第 220・232 図）、両地点で肥前磁器碗（第 14 次地点 52.5%、第 38 次地点 37%）が高く、これに肥前磁器皿（第 14 次地点 22%、第 38 次地点 17%）を加えると肥前磁器製品が半数以上を占める。この肥前磁器碗・皿の主なタイプは「くらわんか手」と呼ばれる量産品の碗・皿で、肥前磁器の量産品を主に受容することがわかる。しかし、両地点では有田町で生産された高級品は出土するが、この割合が第 14 次地点では碗は量産３：高級１、皿は量産２：高級 1 なのに対して、第 38 次地点では碗は量産４：高級１、皿は量産４：高級１と第 14 次地点の方が高級品の割合が多く受容差がみられる。

このことから、17 世紀後期～18 世紀前期は、第 14 次地点、第 38 次地点ともに土器・陶磁器の組成は概ね同じであった。産地別組成は肥前磁器を中心とし、これに土師質土器、肥前陶器が続く組成であった。用途別組成では食膳具が大半を占め、その主な器種は量産

[19]第 38 次地点ではたこ壺を破片計測した結果、30%と高い比率であった。このたこ壺の破損が著しいためこの数値となったが、主体は土師質土器灯火具である。

[20] 油壺の用途については、髪油以外の用途も考えられるが、口径が小さく、体部に膨らみがある器高が低いタイプのものについては絵図資料などで化粧具として使用されている例が多いため、本分類では化粧具に分類した。

品の肥前磁器碗・皿であることから、これらを日用食器として受容したと考えられる。それ以外に、貯蔵具は両地点ともに用途別組成において最も低い比率で、16 世紀末～17 世紀中期の状況よりさらに比率が下がり、土器・陶磁器の用途の目的が「保存用器」から「食用器」主体に移行したことがわかる。貯蔵具の主な器種は両地点とも丹波焼甕・壺であった。調理具も共通し、土師質土器焙烙と丹波焼擂鉢が受容されていた。調度具は、土師質土器灯火具を主体とし、これに土師質土器火鉢・焜炉類が続く組成は共通し、この組成は 16 世紀末～17 世紀中期の組成と大きな変化はないが、調度具全体の比率がやや上昇している。これは灯火具の出土量が増えたこと、肥前陶磁器の神仏具、化粧具などの新器種が新たに加わるためである。

また、唯一異なる点として、有田町で生産された高級食膳具碗・皿に受容差があることである。この差異は経済的格差によるものと思われ、兵庫津の中心部の町屋である第 14 次地点が、兵庫津の北端にある寺院及び門前町屋にあたる第 38 次地点より経済力が高かったと考えられる。

③　18 世紀中期～18 世紀後期

この時期の資料として、兵庫津の中心部の町屋である第 14 次地点の第 1 遺構面、兵庫津の西端にある長楽寺の敷地内である第 36 次地点 SX01 がある。産地別組成を見てみると（第 218・224 図）、肥前磁器が第 14 次地点は 54%、第 36 次地点は 35%ともっとも比率が高く、これに土師質土器が第 14 次地点は 30%、第 36 次地点は 29%、その次に丹波焼が第 14 次地点は５%、第 36 次地点は 10%と続く組成は共通する。用途別組成は、第 14 次地点では食膳具 75%と半数を占め、これに調理具 18%、貯蔵具 4.2%、調度具 2.8%が続く（第 219 図）。その一方、第 36 次地点は食膳具 39%と一番高く（第 225 図）、これに調度具 36%、調理具 17%、貯蔵具８%と続き、調度具が食膳具と近接した比率で第 14 次地点とは組成に差異がある。

第 36 次地点の調度具内で高い比率を示すのが土師質土器灯火具 24.9%、軟質施釉陶器灯火具 19%などの灯火具であり（第 229 図）、これら以外に備前焼、瀬戸美濃陶器、京焼系陶器などの多産地の灯火具が出土し、これら灯火具により調度具の比率が高い値を示す。第 14 次地点でも土師質土器灯火具６%、軟質施釉陶器灯火具 27%と高い比率だが、施釉陶器の灯火具は出土していない（第 223 図）。受容差については、両地点の部屋数や使用頻度にもよるものと考えられる。

貯蔵具は（第 222・228 図）、丹波焼壺・甕が一番多く、第 14 次地点は 81%、第 36 次地点は 44.4%という比率で、第 36 次地点では信楽焼甕が出土するが 1.4%とごく僅かであり、この時期の兵庫津の壺・甕は丹波焼が主体だったことがわかる。調理具は（第 221・227 図）、両地点ともに土師質土器焙烙が一番多く、これに擂鉢が続く組成である。擂鉢の産地であるが、第 14 次地点では 18 世紀前期以降に各地の遺跡で主体をなる堺・明石焼擂鉢は 1.5%とごく僅かで、丹波焼擂鉢が 32%と中心であった。一方、第 36 次地点は堺・明石焼擂鉢 42%が中心で丹波焼擂鉢は 5.7%に過ぎない。この差異であるが遺構の年代差によるものと考えられる。堺・明石焼擂鉢や丹波焼擂鉢の器形や他の陶磁器の特徴から、第 14 次地点第 1 遺構面は 18 世紀中期～後期でも中期に近い年代であり、それに対して第 36 次地点は 18 世紀後期に近いと考えられる。このことから、兵庫津遺跡では 18 世紀後期に擂鉢の主体が丹波焼擂鉢から堺・明石焼擂鉢へ移行したことがわかる。徳利は第 14 次地点では小片で特定できなかったが、第 36 次地点では 11.9%と高い比率を示す。備前焼徳利 0.5%、丹波焼徳利 10%、肥前陶器徳利 0.8%、京焼系陶器徳利 0.6%で多数の産地の徳利を受容する。

調度具は（第 223・229 図）、先に述べた通りに灯火具を中心とする。それ以外に焜炉類、神仏具や化粧具などが両地点でみられるが、神仏具が第 14 次地点は 6 %、第 36 次地点では 8.4%と比率差はないが、産地が第 14 次地点は肥前磁器のみだが、第 36 次地点では丹波焼 0.9%、瀬戸美濃陶器 0.6%、肥前陶器 1.3%、京焼系陶器 1.3%、肥前磁器 4.3%と多数の産地があり、肥前磁器・瀬戸美濃陶器は仏飯具、肥前陶磁器は香炉、仏花瓶は丹波焼、京焼系陶器で用途に応じて産地を使い分けされる。

食膳具（第 220・226 図）は両地点ともに肥前磁器碗が高い比率（第 14 次地点 58.5%、第 36 次地点 52%）である。多く出土するのは「くらわんか手」碗で、両地点ともに量産品の碗を主に受容する。異なる点として、望料碗や朝顔型碗などの蓋を伴う碗が、第 14 次地点では望料碗 2 %、朝顔型碗 0 %で、それに対して第 36 次地点は望料碗 15%、朝顔型碗 5 %と比率が高い。また、これら蓋付碗は同文様の製品は少ない。この他に、口径 10cm 前後の肥前磁器筒型・半球碗、京焼系陶器丸碗・平碗、瀬戸美濃陶器碗などの碗類が両地点で出土し、使用時に選択して用いたことが察しえる。また、これら口径 10cm前後の碗の比率合計が第 14 次地点は 20%に対して、第 36 次地点は 40%と倍近くあり受容差がある。この口径 10cm未満の陶磁器碗は、見込みの使用痕や文献資料から喫茶碗に使用され

る例が多いと考えられている[21]。これらから、両地点共に「くらわんか手」碗を中心としつつも、第 36 次地点では蓋付碗や喫茶碗が多く出土する組成である。

第 36 次地点のような碗類の組成は、内藤町遺跡の内藤宿の旅籠跡[22]や雑司が谷遺跡の門前茶屋跡[23]などの陶磁器組成と共通し、さらに、徳利が特化して多く出土することもこれらの遺跡でもみられる。特に、雑司が谷遺跡の門前茶屋跡で出土する蓋付磁器碗は同文様の碗が少なく、第 36 次地点の蓋付磁器碗の特徴と共通する。以上のことから、第 36 次地点の土器・陶磁器の組成は茶屋的機能を示すと考えられ、さらに、多く出土した灯火具についてもそれに関係する可能性が高いと思われる。

④　18 世紀後期～19 世紀前期

この時期の資料として、兵庫津の周辺部の町屋にあたる第２次地点の第２遺構面、兵庫津の北端にある門前町屋[24]にあたる第 38 次地点の第２面がある。産地別組成をみると（第 212・230 図)、肥前磁器を中心とする組成は共通する[25]。また、用途別組成についても、食膳具が半数近くを占め、それに調理具、調度具、貯蔵具が続く組成も共通する（第 213・231 図)。貯蔵具組成は、第２次地点は丹波焼甕・壺 74%と高く、第 38 次地点では備前焼瓶類 64%と主製品が違うが、器種別にみると甕・壺は丹波焼、瓶類は備前焼がそれぞれ両地点で主体となっており、量比はあるが基本的な組成は共通する(第 216･234 図)。

調理具組成は、第 2 次地点は土師質土器焙烙 60%、丹波焼擂鉢３%、堺・明石焼擂鉢 17%、京焼系陶器土瓶・急須４%、京焼系陶器土鍋・行平 16%、第 38 次地点は京焼系陶器土瓶･急須 43%、京焼系陶器土鍋･行平 29.3%、土師質土器焙烙 10%、丹波焼擂鉢１%、堺・明石焼擂鉢 12.5%などが続く組成である（第 215・233 図)。擂鉢は両地点とも堺・明石焼擂鉢が主体であり比率も近接する。しかし、第２次地点では土師質土器焙烙を中心とするが、第 38 次地点では京焼系陶器煮沸具の比率が高く受容差がある。大坂城跡や伊丹郷町遺跡では、18 世紀代は焙烙が中心で京焼系陶器煮沸具は少なく、第２地点の組成に類似する。それが 19 世紀代に入ると焙烙が激減し、京焼系陶器煮沸具が中心となり第 38

---

[21]長佐古真也「日常茶飯事のこと - 近世における喫茶習慣素描の試み - 」『江戸文化の考古学』吉川弘文館 2000 年
[22]美濃部達也「宿場のうつわ - 内藤町遺跡から出土した文字資料からのアプローチ - 」『江戸遺跡研究会第 14 回大会　食器にみる江戸の食生活』（発表要旨）江戸遺跡研究会 2001 年
[23]水本和美「“ごみ”から読み解く商い - 茶屋と宿場 - 」『江戸遺跡研究会第 17 回大会　続遺跡からみた江戸のゴミ』（発表要旨）江戸遺跡研究会 2004 年
[24]遺構の検出した地点が寺院の敷地の道を隔てた反対側の町屋より検出したため。
[25]第 36 次地点では数値的には京焼系陶器が 32%ともっとも高いが、破損がひどいためであり、実質的には肥前磁器が高いと考えられる。

次地点の組成に類似することから、両地点の差異は時期差によるものと考えられる。しかし、土器・陶磁器を検討すると両地点に時期差はないことから、時期差とも考えられず、他の地点も含めて、再度検討したいと思う。

調度具組成は、両地点とも土師質土器火鉢、土師質土器・瓦質土器焜炉類、軟質施釉陶器灯火具が中心である（第 217・235 図）。異なる点として、肥前磁器化粧具に受容差がみられる。18 世紀後期以前では油壺・鬢水入れが出土したが、18 世紀後期～19 世紀前期から新たに紅皿がみられる。両地点で出土する化粧具組成は、第２次地点は紅皿 0.7%、油壺 0.8%、第 38 次地点は油壺 3.5%である。出土した紅皿は、外面に「京ぎおん小町紅」などの名が施されているものや、型作りによる白磁製品である。紅は、江戸時代は「紅一匁、金一匁」と言われるほど高級品であり経済的格差も想定される。

最後に食膳具であるが（第 214・232 図）、両地点とも肥前磁器碗・皿が食膳具で高い比率であることは共通する。肥前磁器碗・皿の主な器種は「くらわんか手」とよばれる量産品で、これについても共通する。また、異なる点としては肥前磁器碗・皿の高級品の比率である。第２次地点は、碗は９（量産）：１（高級）、皿は９（量産）：１（高級）で、第 38 次地点の碗は４（量産）：１（高級）、皿は１（高級）：１（量産）で、第 38 次地点の方がやや高級食膳具碗・皿を多く受容する。さらに第 38 次地点は不明であるが、19 世紀中期に至ると、第２次地点では碗は７（量産）：３（高級）、皿は１（量産）：１（高級）となり、高級食膳具の碗・皿の割合が増える。

以上のことから、第２次地点、第 38 次地点の土器・陶磁器の組成をみると、新器種の出現時期、器種組成ともに概ね共通していた。このことから、新製品の搬入時期や器種組成については、兵庫津の北端の門前町屋の第 38 次地点と兵庫津の周辺部の町屋である第２次地点とは共通することがわかった。

受容差があるのは、化粧具と有田町で生産された高級食膳具碗・皿などである。どちらも経済的格差によるものと想定できる。第２地点は第 38 次地点より化粧具の比率が高いが、高級食膳具は第 38 次地点の方が多く、ものによって高級品の受容差があることがわかり、言い換えるならば両地点ともに経済的な格差がないと考えられる。ただ、兵庫津の中心部の町屋である第 14 次地点では 18 世紀中期～後期から紅皿は出土し、高級食膳具の比率も高いことから、中心部の町屋と北端の門前町屋や周辺部の町屋では経済的格差はあったと考えられる。ただ、19 世紀中期に至ると、中心部の状況は不明であるが、周辺部の第２次地点でも高級食膳具碗・皿の比率が高くなることから、18 世紀後期～19 世紀前期

にみられた受容差の幅は縮小されていると思われる。

以上、４地点ではあったが同じ分析方法で土器・陶磁器を分析した。このような比較から、兵庫津遺跡では陶磁器の流通は居住者の身分や経済力に関係なく流通され、産地別組成・用途別組成も大差はみられなかった。差異があるのは 17 世紀後期～18 世紀前期に経済力が高い屋敷では肥前磁器の高級食膳具が多く出土し、嗜好品も早い段階から受容されていた。その差異は 18 世紀後期以降には格差が狭まっていた。18 世紀後期、兵庫津では高田屋嘉兵衛などによって北前船業の繁栄や西国諸国の蔵米の廻船・国産物の輸送などの近距離輸送業が活発化した時代である[26]。このような経済的な飛躍が町全体に反映され、陶磁器の格差の減少に結びついた可能性がある。

第２節　ヨーロッパ磁器の受容

１　ヨーロッパ磁器について

以前、麻田藩陣屋跡の遺物整理をした際に、膨大な遺物の中に漆継ぎされた銅版転写の磁器をみつけ「なぜ近代の陶磁器に漆継ぎなのか？」と驚いた。この遺物は、コンテナ数十箱に及ぶ幕末の一括廃棄土坑から出土し、銅版転写製品であったため近代の混入品かと思った。しかし、漆継ぎされていたことと、これ以外に混入品と考えるものがなかったため、幕末以前の遺物と判断し、その後、これがウィロウパターンと呼ばれるオランダ磁器とわかった。

ヨーロッパ磁器の考古学的な研究はごく僅かである。1993 年に永松 実氏が日本各地で出土したものを集成され、続いて 1995 年に定森秀夫氏が追加集成されている。

その他に岡　泰正氏の研究がある。岡氏はヨーロッパ磁器の出土例が多い長崎出島の資料を美術史の立場から同定・考察され、その他に京都、大坂城跡などでも同様の研究を発表されている。この岡氏の研究は、各地で出土した際に参考にされている。

これ以外にも、鈴木裕子氏、松本啓子氏の研究があるが、他の貿易陶磁器と比べると少ないことは一目瞭然でわかる。これは日本での出土量が少ないことと、ヨーロッパ磁器の認識が少ないためである。

今回は、近年に報告された 19 世紀以降のヨーロッパ磁器を再集成した。さらに、永松・

[26]兵庫県史編集専門委員会編『兵庫県史』第４巻 1979 年

定森両氏の集成されたものも合わせ、その出土状況からヨーロッパ磁器の特徴を考えてみる。

2　ヨーロッパ磁器の出土状況

1995 年に定森氏が集成された後、2008 年 7 月までに調査報告されたものを集成したのが表 3 である。これはあくまで実測図もしくは写真が掲載されたものであり、多少の漏れは否めないが大体は網羅したと考えられる。

出土状況をみると、1995 年以降、報告はほぼ倍以上に増えている。その多くは、江戸・大坂・京都などの三都及びその周辺を中心とするが、北海道の福山城、静岡県の山中城、広島県の四日市遺跡、鹿児島県の別府城跡などほぼ全国的に広がる。

3　ヨーロッパ磁器の変遷

全国各地でヨーロッパ磁器が出土していることがわかった。ヨーロッパ陶磁器の古い例としては 17 世紀～18 世紀に長崎や大坂などで出土したドイツ炻器、オランダ陶器が挙げられるが、次に登場するのは 19 世紀の軟質磁器である。ここでは、この軟質磁器を中心にどのように変遷するのか検討する。

軟質磁器の出土時期をみると、江戸後期に出現し、幕末から明治にかけて増える。この状況から、19 世紀前期～中期の製品と 19 世紀中期（幕末から明治初頭）の製品にわけ、時期別に特徴を見てみる。

19 世紀前期～中期、すなわち江戸後期に収まる資料は 7 例と少ない（表 3）。分布は長崎、大坂、江戸などの大都市のほかに、薩摩、松代などの城下町跡もあり、いずれにせよ都市部に集中する。

産地はイギリス、オランダ製品である。胎土は軟質磁器で、器種は食膳具の皿が大半を占め、そのほかに碗・鉢などがある。装飾は銅版転写によるものが中心で、釉薬は染付が多く、赤色釉・緑色釉があり、中には赤・緑色釉を 2 色使いされたものもある。文様はウィロウパターン、ワイルド・ローズパターン、ザ・サプライズパターンなどがある。

19 世紀中期（幕末から明治初頭）に至ると、14 例と一気に出土例が増加する（表 3）。近世後期の遺構を層位的に調査できない遺跡が多いため、表採や包含層遺物として取り上げた例も多いが、遺構内での出土数は前代より倍増しており、この時期に多く流通したと考えられる。

その分布は、ほぼ全国に広がり、前代では長崎や大坂、江戸などの大都市が中心であったが、この時期では、福岡県の大手町遺跡、広島県の四日市遺跡など地方都市や町屋での出土例が増える。

産地のわかるものは少ないが、イギリス、オランダ製品があり、オランダ産のものが目立つ。器種は食膳具が中心で、皿が多いが碗・鉢なども出土量が増える。装飾は、手描きも僅かにあるが、銅版転写が中心で、釉薬は染付が多く、文様は前代より増える。前代で出土した文様の他に、オリンピアパターン、グリーナーパターン、オリエンタルパターンなど多種に及ぶ。

このように、イギリス、オランダなどのヨーロッパ磁器が全国に流通されていた。19 世紀前期～19 世紀中期すなわち江戸後期は出土例が少なく、幕末に至ると一気に出土例が増えるため、幕末頃に流通が本格化したと考えられる。主な産地はイギリス、オランダが中心で、幕末以降はオランダ産が一気に増える。これはオランダのマーストリヒトのレグゥード窯などが、19 世紀中期にイギリスから転写原板や技術を導入し、本格的に磁器生産を始めたことにより、オランダ商館が自国の製品を大量に流通させたためと考えられる。器種は食膳具が大半であり、皿が多いのが特徴である。廃棄された状況にもよるが考古資料では組物で出土した例は少なく、多く出土しても多器種単品で出土する。装飾は、手描きは少なく、大半は銅版転写製品である。これらは本国では量産品に属するものであり、日本へは量産品が主に流通していたことになる。

4　ヨーロッパ磁器の受容

19 世紀以降、各地でヨーロッパ磁器が出土するが、どのように取り入れられたのであろうか。これについてヨーロッパ磁器が出土した地点の性格から時期別に検討してみる。

19 世紀前期～中期に出土した地点は武家屋敷７例、町屋２例にわけられる（表３）。武家屋敷は垂水島津家及び宮之城島津家の屋敷跡、麻田藩家老屋敷跡、松代城武家屋敷、加賀藩前田上屋敷跡など大名の上屋敷から１万石あまりの大名の家老屋敷と様々な階層の屋敷から出土する。

一方、町屋は長崎の万才町遺跡は町年寄を務めた高島家の屋敷跡、もう一ヶ所は、大坂城下町跡で、この屋敷は江戸後期に幕府の公金の出納や両替屋仲間の取締りを行った米屋平右衛門の屋敷跡にあたり、２地点ともに豪商屋敷である。

このことから、町屋は経済力のある屋敷から出土するが、武家屋敷では身分差はあるが

経済的な大差も想定できる。ただ、麻田藩家老屋敷から出土した製品をみると（第237図）、破損したところを焼継ぎではなく漆継ぎされ丁重な処置を施しており、他の陶磁器とは異なる扱いをしていたことが想定される。また、共伴遺物をみると肥前磁器の高級食膳具や京焼碗も出土し、一定量の国産の高級品を所有する。これらからヨーロッパ磁器は、最高級品とは言わないが一万石の大名の家老屋敷でも受容できた製品であったと考えられる。

19世紀中期は、武家屋敷７例、蔵屋敷１例、公家屋敷１例、町屋５例にわかれる。武家屋敷、町屋以外の屋敷地からも出土例が増える。また、町屋は前代では経済力の高い屋敷から出土したが、伊丹郷町遺跡や四日市遺跡などの地方都市、宿場町などの町屋から出土しており、この時期では特別に扱われた高級品のような様相はみられない。このことから、前代では高級品の一つとして武家屋敷や豪商屋敷などで受容されていたが、幕末から明治初頭に至ると、武家屋敷や豪商屋敷はもちろんのこと、蔵屋敷や地方の町屋に至るまで受容されるようになり、より広く受容されるようになったと考えられる。

このように、ヨーロッパ磁器の出土例は1995年以降増えていた。しかし、出土遺構の状況や年代観が不明なものが多く、参考にできるものが少ないのは残念であった。その中で、山下遺跡、麻田藩陣屋跡、広島藩大坂蔵屋敷跡、伊丹郷町遺跡、四日市遺跡などの新資料から、19世紀代のヨーロッパ磁器の受容がわかった。

19世紀、ヨーロッパではマイセンやセーヴルなどの磁器製品が存在したが、これらは輸出せず銅版転写された量産品が主に輸出していた。それは中国製磁器や日本製磁器を模倣した磁器製品よりも、西洋絵画を転写した量産品が新鮮で興味を持たれたことはいうまでもない。

定森氏の集成後、出土例は増えている。しかし、再度、大量に出土した近世後期の遺物を丁寧に見ることにより、出土例はさらに増えると考えられる。ヨーロッパ磁器は19世紀代の海外貿易を知る上で重要であり、陶磁器の受容のあり方を示す貴重な資料であると思われる。今後、さらに資料が増えることを切に願う次第である。

第３節　広島藩大坂蔵屋敷出土の砥部焼

１　砥部焼について

砥部焼は現在の愛媛県砥部町五本町に所在する。安永４年（1774）に大洲藩の命のもとに開窯（上原窯）する。開窯にあたっては肥前国大村藩長与窯から陶工を招きいれたこと

がわかっており、窯跡は上原窯以外に 15 ヵ所確認されている（第 238 図)。

窯跡の発掘調査は、大下田窯跡で実施されているがその他は皆無である。この発掘調査により、横狭間式の連房式登窯を検出し、このことから考古学的にも肥前磁器からの技術的系譜を引く窯であることがわかった[27]。窯道具はタコハマ、ハマ、シノなどの天秤積み道具を中心とし、製品も目痕や蛇ノ目釉ハギを残すものが多いことから長崎県波佐見町周辺の窯と共通性が高いと考えられる[28]。

２　近畿における砥部焼の出土状況

近畿の近世遺跡から出土した砥部焼を示したのが表４で６遺跡と少ない。この他、報告されていないが筆者が確認したところ尼崎城跡、明石城武家屋敷跡、姫路城跡、和歌山城跡がある。

特徴としては、流通は瀬戸内海沿いの都市部を中心とする(第 239 図)。また、後で述べるが広島藩大坂蔵屋敷跡以外で大量に出土した例がないことである。たとえば伊丹郷町遺跡の場合、318 次におよぶ発掘調査次数であるが、その出土量はすべて合わせても 10 点未満である。この状況から「砥部焼」というブランドとして流通したのではなく、磁器碗の一つとして流通したと考えられる。

３．広島藩大坂蔵屋敷跡での砥部焼の受容

広島藩大坂蔵屋敷跡の発掘調査において、19 世紀前期～中期の遺構から砥部焼と考えられる端反碗が大量に出土した[29]。ＳＫ2056 では碗類が多く出土し(第 239 図)、その中で端反碗が一番多かった。端反碗の多くは体部に螺旋文を廻らし草花文や亀甲文などを施した砥部焼端反碗であり、これが 82％占めていた(第 241 図)。広島藩大坂蔵屋敷跡ではＳＫ2056 以外の遺構からもこの砥部焼端反碗が出土しており、この時期に大量に流通したことがわかる。だた、先にも述べたがこれだけ大量に出土する例は近畿にはない。では、なぜ砥部焼の端反碗が広島藩大坂蔵屋敷跡で大量に出土したのであろうか。

本遺跡では、18 世紀代～19 世紀初頭までの遺構から広島産の焙烙が一定量出土する。

---

[27]石岡ひとみ「砥部焼諸窯跡出土の製品と窯道具」『第９回　四国城下町研究会　四国・淡路の陶磁器　－砥部焼・屋島焼の生産と流通』発表要旨・資料集　四国城下町研究会・東洋陶磁学会　2008 年

[28] 中野雄二「波佐見焼と砥部焼の製品・技法の相違」『第９回　四国城下町研究会　四国・淡路の陶磁器　－砥部焼・屋島焼の生産と流通』発表要旨・資料集　四国城下町研究会・東洋陶磁学会　2008 年

[29]赤松和佳「大阪・麻田藩陣屋跡出土の肥前陶磁器」『受容層の違いによる九州当時の様相』九州近世陶磁学会 2004 年

この広島産の焙烙は、近畿では大坂城跡・大坂城下町跡はもちろんのこと本遺跡以外での出土例はなく、このことから国元から運ばれたと考えられる。さらに、この螺旋文を施した端反碗は国元の広島城跡でも大量に出土し[30]、文献資料でも砥部焼が砥部近郊の港から広島藩へ流通したことがわかっており、この端反碗は国元から運ばれてきたと思われる。

このような例は、広島藩大坂蔵屋敷跡の西隣に位置する久留米藩蔵屋敷跡でもみられた。17世紀後期～18世紀前期の遺構から肥前系の擂鉢や碗などが出土する。以上のことから、大都市大坂で陶磁器は安易に購入できたと思えるが、蔵屋敷では焙烙をはじめ碗や擂鉢などの日用品が国元から持ち込まれたと考えられる。

では、このようなあり方を生ぜしめた背景の一つは、蔵屋敷という特質もあると考えられる。蔵屋敷は、年貢米の徴収、年貢米・特産物の販売機能をもつ倉庫兼取引所であった。そこで働く蔵役人は、国元から１年もしくは２・３年交代で派遣されことが多かった[31]。広島藩の場合も２・３年交代で派遣するようで[32]、短期間であるため単身で来る場合が多く、日用品などは藩から支給されたのではないか。蔵屋敷には国元から年貢米や特産物が船で頻繁に持ち込まれており、それと一緒に蔵屋敷内での日用品も持ち込まれた可能性があると考えられる。

このような広島藩大坂蔵屋敷跡の砥部焼端反碗の出土状況は、蔵屋敷での土器・陶磁器の受容のあり方がわかった一例である。

一方で違う解釈も想定できる。広島城跡では砥部焼以外に愛媛県今治市（旧菊間町）産の菊間瓦も大量に出土し、大坂蔵屋敷からも菊間瓦は出土する。菊間瓦は文献資料から広島藩へ流通したことがわかっており、愛媛の対岸である広島へ頻繁に商品のやり取りをおこなっていた。出土した砥部焼は広島藩蔵屋敷経由で大坂市場へ流通したものとも考えられる。

文化年間の資料であるが市場開拓のために大坂への販売を試みたが失敗した記述が残っている[33]。当時の大坂周辺では肥前磁器はもちろんのこと、三田焼、男山焼などの在地の磁器窯が多く点在し、肥前磁器と市場競争していた。そのなかで砥部焼が参入するのは流通体制が整っていなければ容易ではない。そのため広島藩を介した可能性も考えられる。

---

[30]福原茂樹「広島城遺跡出土陶磁器の時期別産地構成について」『関西近世考古学研究Ⅸ』関西近世考古学研究会 2001 年　福原氏からもご教示を得た。
[31]宮本又次「大坂の蔵屋敷と蔵役人」『大阪の研究』第三巻　清文堂出版株式会社 1969 年
[32] 『広島県史　近世１通史Ⅲ』広島県　1981 年
[33]山本典男「砥部焼の歴史的変遷」『四国・淡路の陶磁器 - 砥部焼・屋島焼の生産と流通 - 』第９回四国城下町研究会

ただ、これを立証するには文献資料も含めて、広島城跡をはじめ瀬戸内海沿いの遺跡での状況を検討しなければならず、現時点では前説の可能性が高いと思われる。

第６章　総括

これまで西日本出土の土器・陶磁器から受容と流通を中心に研究をおこなった。ここでは研究成果の概略を項目ごとにまとめることにする。

（西日本における土器・陶磁器の出土状況）

西日本の土器・陶磁器の出土状況は、16 世紀末を境に大きく変化する。16 世紀末以前は、土器・陶磁器の主体は土師質土器、備前焼、常滑焼、瀬戸美濃陶器、中国製磁器などが各地で出土する。産地別組成は土師質土器、備前焼などを中心とし、用途別組成では調理具の擂鉢、貯蔵具の甕・壺などが主体とする組成であった。

これが 16 世紀末～17 世紀前期に至ると、土師質土器、備前焼、瀬戸美濃陶器、肥前陶器、中国製磁器、肥前磁器が共通して出土し、前期にみられた常滑焼は姿を消し、新たに肥前陶器、肥前磁器が出現する。

その組成比は、肥前陶器・肥前磁器などの施釉陶器・磁器が土師質土器や焼締陶器と近接する値を示す遺跡や上回る遺跡が現れる。施釉陶器・磁器の主な製品は碗・皿などの食膳具で、この増加により食膳具が用途別組成で高い比率を示し、本時期には施釉陶器・磁器の食膳具を主体とする組成へ変化する。それが顕著に現れるのが近畿に多く集中し、その代表が大坂城跡や京都、堺環濠都市遺跡などである。近畿以外でも高松城跡や小倉城跡などの西日本の城下町跡で変化する。また、これとは別に、大坂城跡、京都、堺環濠都市遺跡、長崎などでは遺跡内に中国製磁器を主とする貿易陶磁器が多く出土する遺構もあり、遺跡内で施釉陶器・磁器の主産地が異なる様相を示す遺跡もあった。

施釉陶器・磁器以外に丹波焼、信楽焼、上野・高取焼などは擂鉢・甕を主器種とし、窯場近郊の遺跡で高い比率を示していた。

17 世紀中期～18 世紀前期に至ると、施釉陶器・磁器の比率が上昇する。それは大坂城跡や京都などの近畿の遺跡で、それらの比率が上がり、西日本でも広島城跡や高松城跡などでも、近畿の状況まではいかないが、前代より増える。その中心となるのが肥前陶器・肥前磁器である。これらが西日本の各遺跡の産地別組成において高い比率を示し、特に近畿では肥前磁器が主体となる遺跡が目立った。

また、前代では備前焼の擂鉢・甕が各地で高い比率を示し、その一方で丹波焼、信楽焼、肥前陶器、上野・高取焼などは窯場近郊で備前焼と競合していた。しかし、本時期には前

代の備前焼の状況はみられず、遺跡近郊の製品が高い比率を示していた。

18 世紀後期～19 世紀前期では、西日本全域で陶磁器の受容が増えるためか、産地別組成において施釉陶器・磁器が主体となる。その要因は前代と同様に肥前磁器の増加によるもので、西日本の各地で本産地が高い比率を示していた。また、擂鉢については堺・明石焼擂鉢が瀬戸内海沿いで多く出土する。その一方で、肥前磁器、堺・明石焼以外の組成は地域によって異なる。その様相は擂鉢・甕などが生産地周辺で高い比率を示したが、この時期にはそれら以外の器種にまで及ぶ。近畿・四国では京焼系陶器、中国では中国在地陶器、北九州では肥前陶器、上野・高取焼などの施釉陶器が、食膳具から貯蔵具まで多種類の器種が出土するためである。このことから、18 世紀後期～19 世紀前期には肥前磁器の食膳具以外は遺跡近郊の製品が主に出土していた。

（近畿における土器・陶磁器の様相）

近畿出土の土器・陶磁器の産地別組成・用途別組成の特徴から、Ⅰ都市型遺跡、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅲ在郷町型遺跡、Ⅳ集落型遺跡の４類型に分類される。

その変遷は、16 世紀末～17 世紀前期にかけて近畿に分布するのはⅠ都市型遺跡、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅲ在郷町型遺跡の３類型である。産地別組成は３類型とも概ね共通し、土師質土器を主体とし、これに肥前陶器を中心とする施釉陶器・磁器が続き、焼締陶器の比率が低いものであった。用途別組成も食膳具が高い比率を示し、その中心は肥前陶器を主とする施釉陶器・磁器で、これを日用器として受容したのも３類型とも同じであった。

その一方で、中国製磁器や朝鮮王朝陶磁器、東南アジア陶器などの貿易陶磁器の全体量に対する比率が異なり、Ⅰ都市型遺跡が 20～30%ともっとも高く、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅲ在郷町型遺跡と比率が下がり、Ⅲ在郷町型遺跡では５％未満を示し、その受容量が大きく異なる。さらにⅠ都市型遺跡では地点の性格よって、高級品が突出して高い比率を示す例が認められ、他の類型ではそのような例は認められず、高級品の出土状況に相違がみられた。

また、焼締陶器は擂鉢・甕が出土し、産地は近郊に窯場がある場合はそれを主に受容し、なければ広域流通品である備前焼が流通する様相も３類型とも同じであった。

17 世紀後期～18 世紀前期では、３類型以外に新たにⅣ集落型遺跡が加わる。産地別組成は４類型とも共通し、肥前磁器が高い比率を示し、これに施釉陶器・磁器、土師質土器が続き、焼締陶器の比率は前代よりさらに下がる。この主体となる肥前磁器の増加時期が４類型で異なり、Ⅰ都市型遺跡が 17 世紀中期～17 世紀後期と一番早く、Ⅱ城下町型遺跡、

Ⅲ在郷町型遺跡と続き、18 世紀前期にⅣ集落型遺跡が増加しており、Ⅳ集落型遺跡は他の３類型より肥前磁器の日用器としての定着時期が遅いことがわかった。

また、京焼系陶器や堺・明石焼などの新産地の出現期については、Ⅳ集落型遺跡は他の３類型遺跡より陶磁器受容が遅れる傾向が認められた。高級品の割合については、本時期には貿易磁器以外に有田町で生産された高級磁器が出土する。量産品との割合は、Ⅰ都市型遺跡では高級品２に対して量産品３、Ⅱ城下町型遺跡では高級品２に対して量産品３と同様になる。Ⅲ在郷町型遺跡でも高級品１に対して量産品３で前代より割合が僅かに縮まる。Ⅳ集落型遺跡では高級品１に対して量産品４と先の類型３遺跡より高級品の割合に大差がみられる。

また。Ⅰ都市型遺跡、Ⅲ在郷町型遺跡では遺跡内で高級品の受容差があるが、高級品の内容が大きく異なる。Ⅰ都市型遺跡では中国製磁器の清朝磁器や有田町で生産された肥前磁器の金襴手の最高級品が出土する。Ⅲ在郷町型遺跡からは有田町で生産された染付・色絵などの国産磁器が中心で品質に差異がある。後者の状況はむしろⅡ城下町型遺跡と共通することから、Ⅲ在郷町型遺跡内にⅡ城下町型遺跡の陶磁器様相を示す例が現れたとみることができる。

18 世紀後期～19 世紀前期の近畿では、Ⅰ都市型遺跡、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅲ在郷町型遺跡、Ⅳ集落型遺跡の産地別組成は前代と変わらず肥前磁器が高い比率を示し、土師質土器がさらに減少し、陶磁器主体となることは４類型とも類似する。用途別組成で食膳具・調理具が高い比率であることも同じで、食膳具組成で肥前磁器が 50%以上を示すことも共通する。

しかし、京焼系陶器の受容が４類型で異なる。Ⅰ都市型遺跡では、産地別組成において京焼系陶器の煮沸具の増加により、前代まで中心であった肥前磁器を上回る比率となる。用途別組成においても調理具が食膳具より高い比率を示す。Ⅱ城下町型遺跡、Ⅲ在郷町型遺跡でもⅠ都市型遺跡のような大きな変化はないが、本時期に京焼系陶器の煮沸具が増加し、用途別組成において調理具が食膳具と近接した比率を示し、Ⅰ都市型遺跡の様相ほどではないが変化する。しかし、Ⅳ集落型遺跡では京焼系陶器の煮沸具が出土するが、このような変化はみられない。また、京焼系陶器の煮沸具と連動して増加すると考えられる土師質土器の焜炉・火鉢の出土量は僅かであることから、他の３類型遺跡より受容が少なかったと考えられる。

本時期ではⅠ都市型遺跡では突出して高級品が高い比率を示す地点もあるが、それを省

くとⅠ都市型遺跡、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅲ在郷町型遺跡は類似しており、土器・陶磁器様相に大きな差はなくなるが、Ⅳ集落型遺跡では前代より割合は少なくなるが依然として差異はみられた。

以上、近畿の土器・陶磁器の様相から４類型あり、このうちⅠ都市型遺跡は江戸時代を通して、常に器種組成の変化や新器種の出現については早く変化したが、17 世紀後期～18 世紀前期から、他の類型と類似点がみられはじめ、18 世紀後期～19 世紀前期にはⅠ都市型遺跡、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅲ在郷町型遺跡とでは土器・陶磁器様相に大差が見られなくなったが、Ⅳ集落型遺跡は一貫して他の３類型とは共通性が少ないことが明らかとなった。

（四国・中国・北九州における土器・陶磁器の様相）

四国・中国・北九州出土の土器・陶磁器の産地別組成・用途別組成の特徴から、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅱ－２城下町型遺跡、Ⅳ集落型遺跡、Ⅳ－２集落型遺跡、Ⅴ貿易都市型遺跡の５類型に分類される。

16 世紀末～17 世紀前期にかけて四国・中国・北九州に分布するのはⅡ－２城下町型遺跡、Ⅳ－２集落型遺跡、Ⅴ貿易都市型遺跡の３類型である。産地別組成は３類型とも異なる。Ⅱ－２城下町型遺跡、Ⅳ－２集落型遺跡は土師質土器を主体とするが、前者は肥前陶器を中心とする施釉陶器・磁器が土師質土器に続き高い比率を示すことに対して、後者は施釉陶器・磁器の比率が極端に低い。しかし、これら２類型は量比に大差はあるものの、国産陶磁器を中心とする。その一方でⅤ貿易都市型遺跡は中国製磁器や東南アジア陶器などの貿易陶磁器を主体とし、国産陶器が少ない。したがって、本時期ではこれら地域では共通点が少ない３類型が存在することがわかった。

用途別組成は先に述べた通り、Ⅱ－２城下町型遺跡、Ⅴ貿易都市型遺跡は食膳具が高い比率を示すが、この主産地がⅡ－２城下町型遺跡では肥前陶器、Ⅴ貿易都市型遺跡では中国製磁器で、産地は異なるが２類型では施釉陶器・磁器を日用器として受容したと考えられる。その一方、Ⅳ－２集落型遺跡は食膳具が少ないことから、本時期では施釉陶器・磁器の食膳具を日用器としての頻度は少なかったとみることができる。

施釉陶器・磁器のうち中国製磁器や朝鮮王朝陶磁器、東南アジア陶器などの貿易陶磁器の全体量に対する比率は、Ⅴ貿易都市型遺跡では 94.5％を示すが、Ⅱ－２城下町型遺跡５％台、Ⅳ－２集落型遺跡１％未満であり、受容量が全く異なる。その一方で、国産の高級品とされる「桃山陶器」の懐石具や茶器については、Ⅳ－２集落型遺跡ではほとんど出

土しないが、Ⅴ貿易都市型遺跡５％、Ⅱ－２城下町型遺跡３％を示し、貿易陶磁器ほどの大差はみられず、国産の嗜好品の受容については大差がないことがわかった。

また、焼締陶器は３類型とも、産地は近郊に窯場がある場合はそれを主に受容し、なければ広域流通品である備前焼が流通しており、これについては差異がなかった。

17 世紀後期～18 世紀前期に至ると、上記の３類型に新たにⅡ城下町型遺跡が加わる。

産地別組成を見てみると、肥前磁器が高い比率を示し、これに施釉陶器・磁器、土師質土器が続き、焼締陶器の比率が低い点は、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅱ－２城下町型遺跡、Ⅴ貿易都市型遺跡とも共通し、前代はⅡ－２城下町型遺跡とⅤ貿易都市型遺跡に様相差があったが本時期には共通するようになる。肥前磁器の増加は、Ⅴ貿易都市型遺跡が 17 世紀中期～17 世紀後期、Ⅱ城下町型遺跡とⅡ－２城下町型遺跡では 17 世紀後期で、これについては若干の時期差がみられた。Ⅳ－２集落型遺跡の産地別組成は、肥前陶器・肥前磁器が本時期から増加するが、依然として土師質土器・焼締陶器も一定量出土し、先に述べた３類型と比べると施釉陶器・磁器の出土量が少なく、肥前磁器の増加する時期も 18 世紀中期からで共通性はほとんどみられない。

また、京焼系陶器や堺・明石焼、中国在地陶器などの新産地の出現期は、Ⅳ－２集落型遺跡以外の３類型は共通するが、Ⅳ－２集落型遺跡では出土しておらず、したがって、Ⅳ－２集落型遺跡は他の３類型遺跡より陶磁器受容が遅れる傾向が認められた。

用途別組成は食膳具が大半で、調理具、調度具、貯蔵具が続く。これら諸点は、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅱ－２城下町型遺跡、Ⅳ－２集落型遺跡、Ⅴ貿易都市型遺跡とも類似する。食膳具の主産地は、Ⅳ－２集落型遺跡以外の３類型では肥前磁器であるのに対して、Ⅳ－２集落型遺跡では肥前陶器が主体であり、前代と変わらず他の３類型とは陶磁器の受容が異なっていた。

17 世紀後期～18 世紀前期では有田町で生産された染付・色絵などの高級食膳具が各地で出土する。量産品との割合は、Ⅴ貿易都市型遺跡では高級品４に対して量産品１、Ⅱ城下町型遺跡では高級品２に対して量産品３、Ⅱ－２城下町型遺跡では高級品１に対して量産品３、Ⅳ－２集落型遺跡では量産品が中心である。このようにⅤ貿易都市型遺跡とⅣ－２集落型遺跡では前代と変わらず高級陶磁器の受容に大差がみられた。

擂鉢・甕の主産地については、４類型とも広域流通品ではなく近郊の製品がその市場を独占にする様相へ変化していた。

18 世紀後期～19 世紀前期では、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅱ－２城下町型遺跡と新たⅣ集落型

遺跡が出現する。産地別組成を見てみると、肥前磁器が高い比率を示し、これに施釉陶器が続き、土師質土器は前代より減少し、陶磁器が主体となることは３類型とも類似する。用途別組成においても食膳具・調理具が高い比率で、このうち食膳具組成で肥前磁器が50%以上を示すことは、前代ではⅣ－１集落型遺跡はⅡ城下町型の２類型と差異があったが、本時期には類似する。

但し、高級陶磁器の受容については差異あり、前代ではⅡ－２城下町型遺跡よりⅡ城下町型遺跡の方が高級品の割合が多かったが、本時期には両類型が共通する。Ⅳ集落型遺跡は依然として高級品の受容が少なかった。したがって、江戸時代を通してⅣ集落型遺跡・Ⅳ－2集落型遺跡は他の類型より高級品の割合が少ない傾向にあることが認められた。

この他に、京焼系陶器の様相が３類型で異なる。Ⅱ城下町型遺跡では京焼系陶器の煮沸具が増加し、用途別組成において調理具が食膳具と近接した比率を示したが、他の２類型ではこのような様相はみられなかった。

四国・中国・北九州では土器・陶磁器の様相が５類型に分かれることがわかった。このうちⅡ－２城下町型遺跡、Ⅳ－２集落型遺跡、Ⅴ貿易都市型遺跡の存在が明らかとなり、これらは近畿には存在しないものであった。それが近畿に存在する類型が現れる。17 世紀後期～18 世紀前期にⅡ城下町型遺跡、18 世紀後期～19 世紀前期にⅣ集落型遺跡である。特に近畿で存在するⅣ集落型遺跡が西日本において、18 世紀後期以降に急激に増加することがわかった。

（西日本における土器・陶磁器の流通）

近世に陶磁器の陶磁器需要が高まり、生産地においてもそれに対応するように技術的改革が行われ、受容する側の目的によって生産・流通も変化していた。

西日本の陶磁器流通は、１広域（流通①）、２中規模（流通②）、３小規模（流通③）、４嗜好（流通④）、５内容物（流通⑤）による流通にわけることができる。

16 世紀末～17 世紀前期の西日本の流通主体は流通①である。地域に関係なく肥前陶器の食膳具や備前焼の擂鉢・甕などが各地に流通する。これを言い換えるならば西日本で共通した陶磁器流通が展開する。その拠点は、大坂城跡や京都などの近畿の大都市では、新器種が早く出現し、受容量も急増することから近畿の大都市が流通の拠点であったと考えられる。これら近畿の大都市は古代から近世までの政治の中心地である。そのため古くから流通経路が整っていたことも要因の一つと考えられる。

本時期は流通①以外に丹波焼、信楽焼などが窯場近郊に流通圏を形成する流通③、「桃山陶器」の懐石具・茶器が西日本の武家屋敷跡で多く出土する流通④も存在した。また、土師質土器は広域に流通する製品はなく、遺跡内もしくは近在に分布し、その範囲は流通③より狭いものであった。

17 世紀中期に至ると、流通形態が変わる。まず、擂鉢・甕などを主製品とする流通③が各地で小規模な流通圏を形成し、その市場を独占し、前代まで広域に流通した備前焼も、本時期には流通③に属される。これは 17 世紀前期～17 世紀中期に各生産地で技術的改良がされたことが大きく、良質の製品を安定して生産できる体制が整ったため、広域流通品ではなく近郊の製品でもその受容を十分に満たせるようになったためである。また、流通①は、17 世紀中期以降は肥前陶器・肥前磁器の食膳具に限られる。これらは西日本において競合する生産地がなく、特に磁器生産をおこなうのは肥前のみであったことも要因の一つと言えるだろう。

17 世紀後期～18 世紀前期に至ると、肥前陶器・肥前磁器の食膳具は、近畿の大都市から集落に至るまで大量に流通しており、本時期でも近畿を中心に陶磁器流通が展開される。また、丹波焼や上野・高取焼などの流通③は前期と変わらず継続され、新たに中国在地陶器、京焼系陶器が加わり、西日本の窯場近郊で流通③が形成される。

このように陶磁器受容が高まる中で、中規模に流通する堺・明石焼擂鉢や京焼系陶器碗などが出現する。これらの出現は、前代までの広域流通・小規模流通するのではなく、消費者の受容目的、たとえば価格や使用目的によって陶磁器流通がおこなわれた現われである。土師質土器流通については器形にバリエーションがみられるものの、その流通範囲は前期と変わらず小規模に形成し、それ以後も大きな変化はない。

18 世紀後期～19 世紀前期はさらに複雑となり、肥前磁器の食膳具・調度具はその範囲をさらに広げ継続して流通される。その一方で、流通③は新たに京焼系陶器に属する窯が増え、各地で流通③に属する産地が肥前磁器と近接した値を示すなど、大量に流通されるようになる。これは 18 世紀中期まで陶磁器受容が流通①の肥前陶器・肥前磁器の食膳具が主体であったが、本時期にはこれらを主とするものの、それ以外の器種の受容が高まり、肥前磁器以外の製品については近郊の製品が流通されたためと言えるだろう。

この他に流通②は京焼系陶器の煮沸具と流通④が加わり、受容者のニーズによって陶磁器が流通されるように変化していた。

（近世陶磁器からみる西日本の受容）

西日本における近世陶磁器の流通は、近畿を中心に広域・中規模・小規模に流通し、その内容も時代の経過とともに地域性が強くなり、生産地においても生産体制の強弱により、流通圏が広狭された。では流通された陶磁器はどのように受容されるのであろうか。都市や集落には身分・経済力・生活習慣による受容差があるはずである。

兵庫津遺跡の様相をみると、一都市への陶磁器の流通は居住者の身分や経済力に関係なく行われ、産地・用途別組成も大差はなく、あるのは経済格差である。17 世紀後期～18 世紀前期では経済力の高い屋敷では高級食膳具や嗜好品も早い段階から受容される。ただ、その受容差も 18 世紀後期迄であり、18 世紀後期以降はその差幅が縮まる。この時期の兵庫津遺跡は、北前船業の繁栄や西国諸国の蔵米の廻船・国産物の輸送などの近距離輸送業が活発化した時期で、町全体が経済的に飛躍しており、陶磁器の格差減少に結びついたと考えられる。このことから陶磁器の受容差は、地理的条件や身分的条件によって陶磁器の受容差は起こりにくく、むしろどんな辺鄙なところであっても経済力があれば高級陶磁器を受容することができ、そうでなければ量産品の陶磁器を受容するという経済的格差によると考えられる。

経済的格差による受容は、19 世紀代に出土するヨーロッパ磁器から窺える。これは 19 世紀代に高級品の一つとして武家屋敷や豪商屋敷などで受容される。この時期、ヨーロッパではマイセンやセーヴルなどの磁器製品が存在したが、これらは王朝や貴族の専用品のため流通せず、銅版転写された量産品が主に世界各地へ輸出された。日本には肥前磁器という最高級磁器を生産する製品がありながら、このような量産品を高級品として受容される。それはそこに転写された西洋絵画が新鮮であり興味をもたれたためである。それが幕末から明治初頭に至ると、武家屋敷や豪商屋敷はもちろんのこと地方の町屋に至るまで受容される。

経済的格差による陶磁器受容がある一方で、異なる受容もある。広島藩大坂蔵屋敷では蔵屋敷のある大坂城下町跡はもちろんのこと、近畿で僅かしか出土しない砥部焼碗が大量に出土し、これに共伴して広島産の焙烙が出土することから、日用品が国元から持ち込まれたと考えられる。蔵屋敷のある大都市大坂で陶磁器は安易に購入できたと思えるが、このようなあり方を生ぜしめたのは蔵屋敷という特質もある。蔵役人は、国元から１年もしくは２・３年交代で派遣されることが多く、広島藩の場合は２・３年交代で派遣され、短期間であるためか単身で来る場合が多く、そのため日用品などは藩から支給された可能性

が高いと考えられる。

近世土器・陶磁器の多くは生活道具であり、それら一つ一つから当時のさまざま情報の手掛りを与えてくれる。また、土器・陶磁器は、他の材質の出土遺物と比べると残存状態もよく、識別もしやすいため同じ基準での比較が可能である。

今回、統一した分類基準を基に土器・陶磁器を分析し、主に産地別組成・用途別組成を比較研究し、西日本の土器・陶磁器の諸様相を論じた。これら様相は多くの研究者が論じられているが、それはあくまで一部の資料を不統一な分析での展開である。

はじめにも述べたが、近世遺跡の調査は、制約された調査が大半であり、公開されているものはごく一部である。そういう意味で本論の試みは、西日本から出土する土器・陶磁器分析に対応できる分析方法を考案したこととともに、西日本の土器・陶磁器様相を如実に示したと考える。

参考文献

参考・引用

● 論文・研究発表

赤松和佳「近畿地方(3)大阪府下出土の肥前陶磁器について」『国内出土の肥前陶磁　西日本の流通をさぐる　第一分冊』　九州近世陶磁学会 2002 年

赤松和佳「大阪・麻田藩陣屋跡出土の肥前陶磁器」『受容層の違いによる　九州陶磁の様相』九州近世陶磁学会 2004 年

赤松和佳他「赤松守護屋形の総合的研究Ⅲ - 揖保郡新宮町馬立東部地区の発掘調査概要 - 」『大手前大学史学研究所紀要』第 5 号大手前大学史学研究所 2005 年

赤松和佳「関西の磁器窯について - 兵庫・大阪を中心に - 」関西陶磁史研究会第四回研究集会資料集　関西近世陶磁史研究会 2005 年

赤松和佳「大坂城跡とその周辺遺跡における近世丹波焼 - 東播磨・摂津・北河内を中心に - 」『近世丹波焼の研究』大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター研究報告第 3 号　大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター2007 年

赤松和佳「大阪・兵庫の江戸後期における庶民向け肥前陶磁器の様相」『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通　中国・四国・関西編』九州近世陶磁学会 2007 年

石井　啓他『伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅰ』　備前市教育委員会 2003 年

石岡ひとみ「近世砥部焼磁器碗に関する基礎的研究 - 上原窯跡採集資料を中心に - 」『愛媛県歴史文化博物館　研究紀要』12 号　2007 年

石神由貴「摂津三田焼と欽古堂亀祐について」『近世後期における関西窯業の展開 - 国焼と京焼 - 』関西陶磁史研究会第二回研究集会資料集　関西近世陶磁史研究会 2003 年

稲原昭嘉「明石城武家屋敷における 17・18 世紀の器種構成」『関西近世考古学Ⅴ』関西近世考古学研究会 1997 年

稲原昭嘉「明石城武家屋敷に見る 18・19 世紀の器種構成について」『関西近世考古学Ⅹ』関西近世考古学研究会 2002 年

大橋康二『肥前陶磁』考古学ライブラリー55　ニュー・サイエンス社 1989 年

大橋康二「わが国の窯業における生産技術の展開」『窯構造・窯道具からみた窯業 - 関西窯場の技術的系譜をさぐる - 』関西陶磁史研究会第四回研究集会資料集　関西近世陶磁史研究会 2005 年

大橋康二「朝鮮から肥前に伝わった磁器生産技術とその伝播」『日本海域歴史体系　第五巻　近世篇Ⅱ』清文堂 2006 年

岡 光夫「座方経営による立杭焼 - 山間村落における農村副業 - 」『兵庫史学』第 10 号 1956 年

岡本純夫「備前焼と鞆保命酒」『江戸時代の暮らしと備前焼』備前市教育委員会 2008 年

小野正敏「15～16 世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究 NO.2』　日本貿易陶磁研究会 1982 年

小野正敏「城館出土の陶磁器が表現するもの」『中世の城と考古学』新人物往来社 1991 年

川口宏海「16 世紀における大和型土釜の動向」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』1990 年

川口宏海「兵庫県伊丹郷町遺跡の近世後期の遺物組成」『関西近世考古学Ⅹ』関西近世考古学研究会 2002 年

木部和昭「長門・石見の廻船と地域社会」『日本海域歴史体系　第五巻　近世篇Ⅱ』清文堂 2006 年

日下正剛・浜田恵子・松本和彦「四国地方」『国内出土の肥前陶磁　西日本の流通をさぐる　第二分冊』　九州近世陶磁学会 2002 年

日下正剛「四国城下町出土の九州陶磁」『受容層の違いによる　九州陶磁の様相』九州近世陶磁学会 2004 年

日下正剛「江戸後期における農村部出土の陶磁器と地方窯 - 徳島・香川・愛媛編 - 」『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通　中国・四国・関西編』九州近世陶磁学会 2007 年

桑田 優『日本近世経済史』晃洋書房 2000 年

古賀信幸「山口県内出土の近世陶磁 - 肥前系陶磁を中心に - 」『国内出土の肥前陶磁　西日本の流通をさぐる　第一分冊』　九州近世陶磁学会 2002 年

佐藤浩司「肥前陶磁の流通・・・福岡・大分・熊本」『国内出土の肥前陶磁　西日本の流通をさぐる　第二分冊』　九州近世陶磁学会 2002 年

佐藤浩司「小倉名物三官飴とその容器について」『研究紀要第 16 号』北九州芸術事業団 2003 年

佐藤浩司「北九州市域の江戸後期における庶民向け陶磁器の流通」『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通　九州編』九州近世陶磁学会 2006 年

佐藤隆「大坂とその周辺における陶器窯の技術」関西陶磁史研究会第四回研究集会資料集　関西近世陶磁史研究会 2005 年

桜井英治「中世・近世の商人」『新体系日本史 12　流通経済史』山川出版社 2002 年

佐伯純也「鳥取県における肥前陶磁器の様相」『国内出土の肥前陶磁　西日本の流通をさぐる　第一分冊』　九州近世陶磁学会 2002 年

下村節子「枚方宿成立期の陶磁器」『財団法人　枚方市文化財研究調査会　研究紀要第 3 集』財団法人枚方市文化財研究調査会 1994 年

下村節子「枚方宿成立期の陶磁器（その２）」『財団法人　枚方市文化財研究調査会　研究紀要第 4 集』財団法人枚方市文化財研究調査会 1997 年

白神典之「堺擂鉢考」『東洋陶磁 VOL.19』東洋陶磁学会 1989-92 年

積山洋「大坂出土、18・19 世紀の陶磁器」第 6 回関西近世考古学研究会大会要旨　関西近世考古学研究会 1994 年

積山洋「近世初期大坂の肥前陶磁」『陶説　第五三二号』（社）日本陶磁協会 1997 年

橘　倫子「丹波立杭焼における土取り場支配の構造 - 近世後期を中心に - 」『市史研究さんだ』第 4 号 2001 年

中西　聡「近世・近代の商人」『新体系日本史 12　流通経済史』山川出版社 2002 年

中野雄二「18 世紀中葉～19 世紀中葉の肥前染付 - 波佐見製品を中心に - 」『関西近世考古学研究Ｘ』関西近世考古学研究会 2002 年

難波洋三「徳川氏大坂城時期の焙烙」『難波宮址の研究九』財団法人大阪市文化財協会 1992 年

西岡克己「肥前陶磁の動向・島根県（出雲・石見）」『国内出土の肥前陶磁　西日本の流通をさぐる第一分冊』　九州近世陶磁学会 2002 年

乗岡実「備前焼擂鉢の編年について」『第 3 回中近世備前焼研究会』発表要旨　中近世備前焼研究会 2000 年

乗岡実「岡山県下の肥前陶磁器出土状況」『国内出土の肥前陶磁　西日本の流通をさぐる　第一分冊』　九州近世陶磁学会 2002 年

乗岡実「江戸時代の遺跡出土の備前焼 - 瀬戸内地域を中心に - 」『江戸時代の暮らしと備前焼』備前市教育委員会 2008 年

長谷川眞「三田焼と兵庫のやきもの」『市史研究さんだ』第 7 号 2004 年 a

長谷川眞「近世丹波焼の成立と展開 - 丹波焼における技術移入・導入と技術拡散を中心に - 」『塵界』15 号兵庫県立歴史博物館 2004 年 b

畑中英二『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版　2003 年

浜田恵子「土佐の近世陶磁器窯－能茶山窯製品と生産と流通」『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通　中国・四国・関西編』九州近世陶磁学会 2007 年

藤澤良祐『瀬戸市史　陶磁史篇』6　愛知県瀬戸市 1998 年

福原茂樹「広島・岡山地域の生産と流通」『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通　中国・四国・関西編』九州近世陶磁学会 2007 年

本城正徳「近世の商品市場」『新体系日本史 12　流通経済史』山川出版社 2002 年

前山博『伊万里焼流通史の研究』誠文堂 1990 年

三木 弘・渡辺晴香「堺の酒造業について - SKT959 地点の調査成果とその位置付け - 」『大阪文化財研究』第 32 号 財団法人大阪府文化財センター2007 年

村上 勇「「寛永 21 年」銘木札に伴う陶磁」『貿易陶磁研究 NO. 6 』　日本貿易陶磁研究会 1986 年

村上伸之「肥前における初期の陶器生産に関する考察 - 主として地域差の問題点を中心に - 」『有田町歴史民俗資料館・有田焼参考館　研究紀要』第 6 号　有田町歴史民俗資料館・有田焼参考館 1997 年

村上泰樹「兵庫・西播磨の近世窯址資料について‐揖保郡新宮町新宮焼の資料紹介‐」『塵界』第 12 号　兵庫県立歴史博物館　2000 年

村上泰樹「銘のない姫路・東山焼-興禅寺山址・男山窯址の表採資料の紹介と検討‐」『塵界』第 19 号　兵庫県歴史博物館 1999 年

森毅「十六・十七世紀における陶磁器の様相とその流通―大坂の資料を中心に」『ヒストリア』第一四九号　大阪歴史学会 1995 年

森毅「大坂における 17 世紀の供膳具」『関西近世考古学研究Ⅶ』関西近世考古学研究会 1999 年

森恒裕「淳心学院出土遺物の再検討　16 世紀後半から 17 世紀初頭における姫路城下町の様相に関する予察」『城郭研究室年報　第 1 号』姫路市立城郭研究室 1991 年

森恒裕「市立城南小学校から出土した 17 世紀前半期の遺物について」『城郭研究室年報　第 4 号』姫路市立城郭研究室 1994 年

森恒裕「東山焼‐姫路城下町出土資料の検討‐」『関西近世考古学研究Ⅹ』関西近世考古学研究会 2002 年

森内秀造「古出石焼の分類とその基準」『山口コレクション‐古出石焼‐』兵庫県歴史博物館 1997 年

山川　均他「奈良・和歌山・三重」『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通　中国・四国・関西編』九州近世陶磁学会 2007 年

脇田修『日本近世都市史の研究』財団法人 東京大学出版会 1994 年

● 調査報告書

赤松和佳他『豊中市蛍池中町所在　麻田藩陣屋跡　－蛍池駅西地区第 1 種市街地再開発工事に伴う埋蔵文化財調査報告』2002 年（財）大阪府文化財センター

兵庫県赤穂市教育委員会『発掘された赤穂城下町』2005 年

泉佐野市教育委員会『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査報告 61　若宮遺跡・上町東遺跡　南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業に伴う発掘調査』2001 年

伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所『有岡城跡・伊丹郷町遺跡Ⅴ』1997 年

伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所『有岡城跡・伊丹郷町遺跡Ⅵ』1999 年

伊丹市教育委員会『有岡城跡・伊丹郷町遺跡Ⅶ』2001 年

兵庫県猪名川町教育委員会『多田銀銅山代官所跡遺跡』2006 年

財団法人大阪市文化財協会『大坂城跡Ⅶ』2003 年

財団法人大阪市文化財協会『大坂城Ⅹ』2009 年

財団法人大阪市文化財協会『大坂城下町跡Ⅱ』2004 年

財団法人大阪市文化財協会『住友銅吹所発掘調査報告』1998 年

財団法人大阪市文化財協会『天満本願寺跡発掘調査報告Ⅰ』1995 年

財団法人大阪市文化財協会『天満本願寺跡発掘調査報告Ⅲ』1998 年

財団法人大阪市文化財協会『難波宮址の研究八』1984 年

財団法人大阪市文化財協会『難波宮址の研究九』1992 年

財団法人大阪市文化財協会『難波宮址の研究十一』2000 年

財団法人大阪市文化財協会『堂島蔵屋敷跡』1999 年

財団法人大阪市文化財協会『広島藩大坂蔵屋敷跡Ⅰ　大阪市教育委員会による大阪市立近代美術館（仮称）建設に伴う発掘調査報告書』2003 年

財団法人大阪市文化財協会『広島藩大坂蔵屋敷跡Ⅱ　大阪市教育委員会による大阪市立近代美術館（仮称）建設に伴う発掘調査報告書』2004 年

大阪大学埋蔵文化財調査委員会『久留米藩蔵屋敷跡 - 大阪大学中之島センター建設に伴う調査報告 - 』2003 年

大阪府文化財調査研究センター『堺環濠都市遺跡Ⅰ（SKT959 地点）』2008 年

大阪府文化財調査研究センター『志紀遺跡（その２・３・５・６）大阪府営八尾志紀住宅建て替え事業に伴う発掘調査報告書』2002 年

大手前女子学園有岡城跡調査委員会『有岡城跡・伊丹郷町Ⅰ』1987 年

岡山市教育委員会『岡山城本丸下の段発掘調査報告』2001 年

岡山市教育委員会『足守藩武家屋敷跡１』1995 年

岡山市教育委員会『足守藩武家屋敷跡２』2001 年

香川県埋蔵文化財研究会『空港跡整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第３冊　空港跡地遺跡　Ⅲ』1998 年

香川県教育委員会他『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第４冊　高松城跡（西の丸町地区Ⅱ）』2003 年

香川県教育委員会他『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第５冊　高松城跡（西の丸町地区Ⅲ』2003 年

関西文化財調査会『高野山金剛峯寺遺跡発掘調査報告 国宝八大童子他 115 体保存施設建設に伴う金剛峯寺遺跡発掘調査』2005 年

財団法人京都市埋蔵文化財研究所『伏見城跡』2007 年

北九州市芸術文化財振興財団埋蔵文化財調査室『大手町遺跡第５地点 - 共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 - 』2006 年

北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室『小倉御普請所跡』2001 年

北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室『竪町遺跡１地点』2000 年

北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室『竪町遺跡２地点』2003 年

北九州市芸術文化財振興財団埋蔵文化財調査室『京町遺跡２』1994 年

北九州市芸術文化財振興財団埋蔵文化財調査室『黒崎城跡１』2005 年

北九州市芸術文化財振興財団埋蔵文化財調査室『黒崎城跡６』2008 年

北九州市芸術文化財振興財団埋蔵文化財調査室『木屋瀬宿本陣跡・脇本陣跡３』2001 年

北九州市芸術文化財振興財団埋蔵文化財調査室『室町遺跡第５地点 - 商業施設建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 - 』2006 年

財団法人高知県埋蔵文化財センター『高知城跡 - 伝下屋敷跡史跡整備事業に伴う発掘調査報告書 - 』1995 年

財団法人高知県埋蔵文化財センター『小籠遺跡Ⅱ』1996 年

財団法人高知県埋蔵文化財センター『小籠遺跡Ⅲ』1997 年

財団法人古代学協会『押小路殿跡　平安京左京三坊十一町』1984 年

堺市教育委員会『中百舌鳥遺跡発掘調査報告 - 堺市中百舌鳥町４丁 NAN15 地点・筒井家屋敷内 - 』1989 年

堺市教育委員会『中百舌鳥・長曽根遺跡発掘調査概要報告』1992 年

佐賀市教育委員会『寺小路遺跡 - １・２区の調査 - 』2005 年

佐賀市教育委員会『西中野遺跡 - Ⅱ－3 区の調査 - 』2007 年

三田市教育委員会『屋敷町遺跡』1995 年

下関市教育委員会『長門国府跡（金屋地区）』2001 年

下関市教育委員会『長門国府跡（惣社地区）』2001 年

下関市教育委員会『長門国府跡（宮の内地区）』2001 年

島根県教育委員会『史跡富田城関連遺跡群発掘調査報告書』1983 年

島根県教育委員会『富田川河床遺跡発掘調査報告書Ⅲ』1983 年

高砂市教育委員会『高砂町遺跡』1996 年

津和野町教育委員会『津和野城下町 祇園町遺跡』1999 年

財団法人徳島県埋蔵文化財センター『新蔵町１丁目遺跡　合同庁舎地点（旧知事公舎）』1998 年

財団法人徳島県埋蔵文化財センター『新蔵町１丁目遺跡　企業局総合管理事務所地点Ⅱ』2000 年

財団法人徳島県埋蔵文化財センター『新蔵町３丁目遺跡　徳島保健所地点』2000 年

財団法人徳島県埋蔵文化財センター『南前川町１丁目遺跡』2002 年

財団法人鳥取県教育文化財団『鳥取県米子市米子遺跡６遺跡』1996 年

財団法人鳥取県教育文化財団『鳥取県米子市米子遺跡 21 遺跡』1998 年

長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書第 17 集』1988 年

長崎市教育委員会『築町遺跡―築町別館跡地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1997 年

長崎市教育委員会『国指定史跡　出島和蘭商館跡　西側建造物復元事業に伴う発掘調査報告書』2000 年

長崎市埋蔵文化財調査協議会『万才町遺跡―寺院建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』2003 年

奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成 10 年度』1999 年

奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成 11 年度』2001 年

財団法人東広島市教育文化振興事業団『四日市遺跡発掘調査報告書Ⅰ』2004 年

財団法人東広島市教育文化振興事業団『四日市遺跡発掘調査報告書Ⅱ－第５・６次調査』2005 年

財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『廿日市町屋跡』1999 年

財団法人広島市文化財団『広島城遺跡基町高校グランド地点』1999 年

広島市教育委員会・財団法人広島市文化財団『史跡広島城跡本丸遺構保存状況調査報告』2004 年

財団法人広島市文化財団『広島城跡大田川河川事務所地点』2006 年

福岡市教育委員会『博多 61－下川端地区市街地再開発事業に伴う博多遺跡群第 89 次調査の概要』1998 年

福岡市教育委員会『博多 68－下川端地区市街地再開発事業に伴う博多遺跡群第 96 次調査の概要』1999 年

宮津市教育委員会『宮津市文化財調査報告第８集』1984 年

宮津市教育委員会『宮津城跡第５次発掘調査概要』1986 年

財団法人八尾市文化財調査研究会『久宝寺寺内町遺跡第１次調査 -「八尾市まちなみセンター」建設工事に伴う発掘調査報告書 - 』2004 年

財団法人八尾市文化財調査研究会『宮町遺跡』1983 年

大和郡山市教育委員会『大和郡山城下町　紺屋町・新紺屋町地区発掘調査報告書』1998 年

大和郡山市教育委員会『大和郡山城下町　旧奥野家（紺屋跡）発掘調査報告書』1999 年

大和郡山市教育委員会『馬司遺跡』2001 年

山口県教育委員会『須佐唐津窯』1983 年

財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター『萩城跡（外堀地区）Ⅰ』2002 年

財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター『萩城跡（外堀地区）Ⅱ』2004 年

財団法人和歌山県文化財センター『根来寺坊院跡』1994 年

財団法人和歌山県文化財センター『和歌山城跡発掘調査概報』1997 年

財団法人和歌山市文化体育振興事業団『秋月遺跡第６次発掘調査概報』1998 年

財団法人和歌山市文化体育振興事業団『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報６－平成８（1996）・平成９（1997 年）

挿　図